

ハイスクールD×D～転
生するブレイヴ使い～(停止)

ブレイヴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界を救う為、神々の砲台の引き金となった救世主「馬神弾」はその世界から消滅する。しかし、ダンに待ち受けていたのは・・・新たな人生を歩む為、異世界に転生する事だった。その世界で、新たに出来た仲間達と共に、ダンの新たな戦いが始まるのであった・・・。

目次

序章

～プロローグ～ | 1

第一章旧校舎の太陽龍とディアボロス

～第1話「転生と説明と学園へ通

う事になりました」～ | 6

～第2話「転入」～ |

13

～第3話「友の

死・・・ダンの決意！」～ | 26

～第4話「新たなる力、

復活の太陽龍！」～ | 51

～第5話「ようこそ、オカル

ト研究部へ！」～ | 66

～第6話「説明と勧誘」～ | 80

～第7話「無限

の龍神と金髪聖女」～ | 92

～第8話「はぐれ悪魔の討伐！赤きブ

レイヴ、砲竜バル・ガンナー!!？」

105

～第9話「ダンの正体と語

られる力・・・」～ | 124

～第10話「二誠の危機！青のブレイ

ヴ、牙皇ケルベロード!!？」～ | 129

く
お
知
ら
せ
く



序章

くプロローグく

—白い空間—

此処、白い空間にて・・・一人の青年が倒れていた。

「っ！・・・ここは、何処なんだ・・・？」

青年は目を覚まし、ゆっくりと立ち上がり・・・辺りを見渡した。青年の名は、馬神弾と言い・・・自分のいた世界と未来を救った救世主であり、カードバトルラーである。

「確か俺は、バローネとバトルして・・・バトルに勝つて・・・神々の砲台の引き金になって・・・消滅した筈・・・」

『それは俺が、お主を此処へ呼んだからじゃ』

「っ！誰だ!？」

突然何者かの声があったため警戒態勢に入る。

『そう警戒するな・・・俺は、お主の敵ではない。』

声の主は、ダンにそう言ったのだ。

「(確かに、危険な感じはしないな・・・。)」

ダンは、心の中で思いながら、警戒を解いた。

「なら、アンタは一体何者なんだ？何故、俺をこの空間に呼んだんだ？」

『フム……では、その問いに答えよう。まず、俺は……お主達がいる世界で言う神じやよ。』

「神だつて!?!」

それを聞いたダンは、驚くのだった。

『左様……そして、お主を此処に呼んだのは……お主を、転生させる為じやよ。』

「俺を転生する為だつて？」

ダンは神が言った事を聞き返した。

『そうじゃ、ある者の頼みでな……』

「ある者？（誰なんだ、一体……）」

ダンは、自分を転生させて欲しいと神に頼んだ相手を誰なのか考えるのであった。

「その前に、一つ聞きたい事がある。まゐは……俺の仲間達やあの世界で生きる人々や魔族は？未来はどうなったんだ!?!」

ダンは神に叫んだ。

『大丈夫じゃ、お主が引き金になったおかげで……未来は救われた。』

「そうか……良かった、皆無事で……」

ダンは、安心する様に微笑んだ。

『さて、安心していているところ悪いが．．．もう一度お主に聞こう．．．転生するか？』
「．．．」

ダンは、目を閉じて暫く考えた後、決意するように目を開けた。

「頼む。」

ダンは、真剣な表情でそう言った。

『承知した。では、お主を転生させるぞ？』

そう言って、神は呪文を唱え始めた。すると、ダンの立っている場所が光り出し：
ダンを包み始める。

「（緊張するな．．．）」

ダンは苦笑しながら、思った。

「クラツキー、お前はいつも俺を支えてくれた．．．ありがとう．．．お前は、最高の親友だ！硯、今まで12宮Xレアを集めてくれて．．．俺に協力してくれて．．．ありがとう！剣蔵、いつも色々な事を調べてくれてサンキューな．．．お前にはいつも助けられたよ．．．本当にありがとう！ゾルダー、迷っている俺を助けてくれてありがとう．．．勇貴にもう一度会った感じがして、とても嬉しかった！ユース、お前とのバトル．．．結局俺の勝ち越しで終わったな．．．でも、お前のお陰で、もう一度、俺の仲

間違に会えた！ありがとう！！プリム、いつも、コアブリットの修理サンキューな…：俺には機械の事は、分からないけど…：それでも、俺の支えになったよ。ありがとう！！アン、ファン…：短い間だったけど本当に楽しかった！それから、おとさん、おかさんを見つけられなくてごめんな…：。それから、バローネ…：お前とのバトル…：最高に楽しかった！結局、決着は着けないままだけど…：最高だった！…：最後にまゐ、戻れなくて、一緒に居られなくて…：ゴメン。あの時、お前が俺を未来に連れて来てくれた事…：本当に感謝している！あの時、俺にもう一度…：生きる実感を与えてくれてありがとう！俺はもう…：お前に会えないけど、俺はいつもお前の事を見守っている！！本当にありがとう…：そして、さよなら…：俺の愛した人…：」

ダンは、ゆっくりと目を閉じると同時に光が消えると共にその場から消えた。

『行ったか…：。汝の人生に祝福あらんことを…：。激突王…：。いや、ブレイヴ使い馬神弾よ。』

神はそう呟いて…：。この空間から消えた。

——約束は、守ったぞ…：。

ー
ー
ー
マ
ギ
サ

第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス

～第1話「転生と説明と学園へ通う事になりました」

)

【第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス】

～第1話「転生と説明と学園へ通う事になりました」～

ー ジリリリリリッ!!!!カチッ!ー

鳴り響いてた目覚まし時計は、先ほど寝ていた青年によって止められた。

「……………ん……………うん……………此処は?」

青年は少し寝惚けているが、辺りを見渡している内に、意識を覚醒した。

「そうだった。転生したんだったな、俺は……………」

青年……………いや、馬神弾は状況を思い出すのだった。

「転生したのはいいが……………俺は、この後どうすればいいんだ?」

ダンは、これからどうするかを考えていると……………

「……………ん?」

ダンは、机の上に長方形型の機械とデツキケースと一枚の封筒を見つける……。
「あれは……俺のデツキケース!？」

ダンは、自分のデツキケースがある事に驚き……そして、デツキケースを開け、中身を確認しただした……。

——デツキ確認中……——

「間違いない、俺のデツキだ……しかも、十二宮Xレアもある……いったいどうなってるんだ?」

ダンは、考え始めた。

《そのことに関して、私が説明致します。》

すると、女性の声が聴こえたのだった。

「っ!? 今のは……」

ダンは、辺りを探し始めるが……誰もいなかった。

《あつ、すみません。封筒の中です……。》

女性の声は、自分の場所をダンに教える。

「この封筒か……」

「ダンは、手に取った封筒を開けると中から色取り取りの結晶型ネックレスが入っていた。」

「(ネックレス?) 君が、声を掛けたのか?」

《はい、そうです。初めまして、マスター……私は、マスターの神器(セイクリッド・ギア)のエンシェリット・ギア【古龍の神帝】と言います。》

「龍だつて!?!」

「ダンは、神器と名乗る彼女に驚く。」

《はい、ですが……私は龍だけでは無く、神の名を持つ存在全て私と言つては過言ではありません。》

「どういう意味だ?それに神器つて何だ?」

「ダンは、神器に聞いた。」

《では最初の質問……私は、神々を統べる存在と言う者なのです。》

「神々を統べる……すごいな。」

「ダンは素直に感想を言った。」

《ありがとうございます。続いての質問は、神器……即ち、神が人間に与えた力と言つたほうがいいでしょう。》

「(つまり、この世界にも何かあるという事なのか?それだけこの世界が危ないという訳

か……)」

ダン、この世界にも危険な事があると感知する。

「(でも、それ以前に……彼女はある意味で物凄い神器だつて事が分かった。)」

ダンは、彼女の話の話を聞いて、素直にそう思った。

「凄いな……シエリアは……」

そして、口に出すダン。しかも、考えついた名前と呼んだのだった。

《シエリア?》

彼女は、ダンに聞き返す。

「ああ、君の名前だ。」

《私の……名前?》

「ああ……迷惑だったか?」

《いえ、気に入りました……! 良い名前をありがとうございます、マスター!》

嬉しそうにダンにお礼を言った。

「そうか、それは良かった……とところで、シエリア。」

《はい、何でもしようかマスター?》

「さっきの質問何だが……どうして、俺のデッキがあるんだ?」

ダンはシエリアに質問する。

《それは、神様がマスターの為に「戦う力が必要ななら馴染んでいる物の方が良いじやろう？」という事で、私と一緒にマスターに送ったのです。それに・・・そのデッキがあつてこそ、私の力が発揮されるのです。》

「どういう事だ？」

《私は、この世界の神器とは特殊で魂・・・生命がこめられているモノとシンクロしない限り、戦う力が半減してしまうのです。》

「なるほど・・・。」

《そして、マスターが持っているカードはその条件を満たしているんです。》

「そうか・・・。」

《では、質問は宜しいですか？》

「あつ、待つてくれ！最後に良いか？」

ダンは思い出すように、慌てて待つたをかけた。

《はい、何でしょうか？》

「いや、これは大変重要何だが・・・転生したのは良いが・・・俺は、この後どうすればいいい？」

そう、この後どうしたらいいか不安になるダン。

《あつ、そうでした・・・その事についてですが、マスターには学園に通つて頂きます。》

「学園……(そう言えば……普通に、学校に行く事があまりなかったな俺……)」
 ダンは、学校の単語を聴いて、悲しそうな表情になった。

《……マスター?》

「つーいや、何でもない……それより、学園に通う事は分かったが……なんて、名前の学園なんだ?」

《えつとですね……駒王学園って言う“悪魔”も通っているところですね。》

「えっ☒悪魔!?」

ダンは、気の抜けた感じで驚いた。

《あっ、はい……そもそも、この土地は悪魔(魔王様)の妹様が管理しているのです……》

ダ「そ、そうなのか……(凄いな……)。」

《この際です……この世界の事を教えましょう……》

「ああ、頼む……。」

《分かりました、では……》

く神器、説明中……く

《————で、以上です。》

「成る程な……（改めて話を聞くと凄いな……悪魔だけじゃなく、堕天使や天使、龍や神までいるなんてな。もう、この世界はファンタジーだらけって事、か……）」

ダンはそう思い、苦笑する。

《話も終わりましたので、明日から学園生活の始まりですな♪》

「ああ、じゃあ、もう暫く休ませてもらう。」

《はい、分かりました！お休みない、マスター。》

「ああ、おやすみシエリア。」

ダンは、再び瞼を閉じて寝るのであった。

————第1話　END————

〈第2話「転入」〉

【第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス】

〈第2話〉

——「転入」——

この世界に転生し、世界を救った青年・・・【馬神弾】。

そして、今日から駒王学園に転入するのだが・・・

「・・・」

現在、ダンは自分のデツキを再構築している。

因みにこの作業は、昨日の午後10時〜現6時まで行っていた・・・。それから、皆さんも疑問をお持ちでしょう・・・。ダンはその戦いの後にすぐ、この世界に転生した事になる・・・。つまり、ここに来て、あの戦いで使用したデツキ十二宮Xレア全てという事になる・・・。だが、あの時デツキと一緒に長方形型機械があつたのだつた。そして、その機械の中にダンが今まで、使用していたカードが入っていたのだつた。そのお陰で、現在デツキ構成が出来るのである。因みに、この機械の操作の仕方は・・・画面

の中にあるカードで、欲しいカードがあればそのカードをタッチする。すると、カードは実体化するのである。そして、使用しないカードは機械に近づけると・・・カードが機械に入るシステムになっている。それから、この機械の仕組みですが・・・皆さんも、「どういう仕組みなのだろう？」と気になっているでしょう・・・それに関しては企業秘密である。（作者の私でも、この仕組みは・・・分かりません（＾＾；）

そして、暫くし・・・

「・・・出来た。」

完成したのである。

《お疲れ様ですマスター・・・》

「ああ、ありがとう。後、おはようシエリア。」

《はい！おはようございます、マスター。》

「そう言えば・・・今、何時何だ？」

ダンはそう思いながら時計を見る。

「6時15分か、結構掛かったな・・・。」

そう言つて、苦笑する。

「さて、着替えるか・・・。」

ダンは、そう言つて、制服に着替える・・・。

——着替え中——

「これで良いか……。」

ダン、駒王学園の制服に着替えた。ちなみに、ダンの姿は……制服にパーカー付きの私服を着ている状態である。

「(少し、着慣れない感じはするけど……まあ、いつか……) 後はデツキを鞆の中に入れて、シエリアを首にかけて……準備OKだな。」

《それでは、学園に向かいましょう!》

「ああ。」

ダンは、家を出ると同時に鍵を掛ける。

「よし、行くか……。」

ダンは、そう言つて、学園に向かった……

ダンが歩いていると、幾つか視線を感じるのだった……

「(結構、見られているな……。)」

《(やはり……転入と言うだけあって、視線が凄いですね……)》

「(そうだな……)」

シエリアとダンは念話で話をした。因みに……念話は昨日、ダンがデツキ構築して最中にシエリアが教えたのだった。

「まあ、見られているのは慣れていくし・・・そこまで気にはしないな。」
この複数の視線を気にすることなく、学園に向かうダン。

「おはよー!!」

「おはよー!!」

「ようー!」

「おう、おはよ」

校門には、複数の生徒達が登校して来た・・・。

「すごい人数だな・・・と言うか、大半は女子だな。ここの生徒は・・・」

ダンは学年玄関に入り、下駄箱に靴を入れながら思ったのだった。(因みに2年生です。)

上履きを履き、職員室に向かった。

「(そう言えば・・・職員室って、何処なんだ?)」

ダンが、そう考えていると・・・

「・・・どうしたんですか?」

ダンの後ろから声があったので、振り返ると・・・

「・・・」

白髪で、無表情の少女がダンを見つめていた。

「・・・貴方は、見た所・・・此処の生徒じゃないですね?誰何ですか?」

少女は、ダンに質問する。

「えっと、今日から転入する事になったんだが・・・職員室の場所が分からないから迷っているって、感じかな？」

ダンは、苦笑しながら質問に答える。

「そうだったんですか・・・。」

「えっと、すまないが・・・職員室の場所を教えてくださいませんか？」

ダンは、少女に職員室の場所を尋ねる。

「・・・職員室でしたら、少し行つた先にあります。」

「そっか・・・すまない、助かった。」

「いえ・・・礼を言われるほどではありませんと思います。それに・・・そのまま行けば、

職員室に着いたかもしれませんし・・・。」

「それでも、助かったよ・・・ありがとうかな？」

「・・・どういたしまして。では、私はこれで・・・。」

「ああ、ありがと・・・。」

「・・・では」

そう言つて、少女は歩いてその場から去つて行つた。

「俺も、行くか・・・。」

ダンも再び、職員室に向かうのだった。

——?? side ——

初めまして、皆さん・・・私の名前は、塔城小猫と言います・・・。先程まで、転入生らしき人物に、職員室の場所を教えてくださいました。それにしても、先程の転入生から何か・・・不思議な雰囲気を感じられました。例えるならそう、人を惹きつける様な感じで・・・何か、優しく包まれる感じですよ。本当に・・・不思議な人です。少し、興味が湧いてきました・・・今度会ったら、話をしてみたいです。私はそう思って、自分の教室に行きました・・・。

——小猫 side out ——

ダン は先程の女子生徒に、職員室の在りかを教えて貰い・・・そちらに向かいながら、さっきの女子生徒の事を考えていた。

《《どうしました、マスター?》》

シエリアは、考えているダンに話しかけた。

「ん? あ、ああ・・・実は、さっきの子なんだが・・・もしかして、彼女は悪魔なのか?」

ダン は先程の女子生徒が、悪魔ではないかとシエリアに聞いてくる。

《《はい、彼女は悪魔で間違いありません。》》

「(そうか・・・)(それにしても・・・何で、彼女に猫耳があつたんだ?)」

ダンは、女子生徒に猫耳があつた事に疑問を持つのだつた。

「つと、職員室に着いたな。」

考えている間に、職員室に着いたのだつた。

「それじゃあ、入るか・・・」

ダンは、職員室に入つて行つた・・・。

—————
side—————

よく、皆！俺は、兵藤一誠つて言うんだ！よろしくなッ!!? 後、皆からイツセーつと
呼ばれているぜ!!?」

「なあ、イツセー・・・聞いてるか?」

すると、眼鏡をかけた男子生徒が俺を呼んだ。

こいつの名前は、元浜と言つて・・・俺の友人の一人で、ロリコン好き。

「ああ、すまん。何だっけ・・・?」

「だから、このクラスに転入生が来るつて話だよ。」

「何！マジか!?!」

元浜の言葉を聞いて驚く、俺のダチの一人……丸刈りの松田……あつゝそう言えば、そうだったな……しかし、確かに気になるな……誰だ？野郎が来るのか!?美少女が来るのか!?俺としては、美少女でおっぱいが大きい子がいいな……

——授業のチャイム——

俺が、考えていると授業の始まるチャイムがなったのだった。

「おゝい、席に着け……」

そして、教師が入って来た。

「おっし！全員揃ってるな？それじゃあ、授業が始める前に……転入生を紹介する！」

「先生！男子ですか!?女子ですか!?!」

「俺は、美少女を希望でゝす！」

松田がそう言ってきた。俺も松田に賛成だ!!?

『俺達もです!!!』

俺が、そう思っていると……男子全員が賛成して来た。

「残念だったな、男子諸君……。そして、喜べ！女子生徒達よ!!?かなりの、イケメ

ン男子だ！」

女子生徒達：『やった——!!!』

男子生徒達『NO——ッ!!!』

女子は喜び、男子は叫ぶ・・・マジか！野郎かよ!? しかも、イケメンだと!!??

「静かにしろ〜! お〜い、入って来〜い!」

先生の言葉に扉が開くと・・・赤髪野郎が、入って来た。

うわっ! 滅茶苦茶イケメンだ!!??

「んじゃあ、自己紹介頼むわ。」

「こつちに、転入して来た・・・馬神弾だ。分からない事だらけだけど・・・色々、教えてくれると助かる。今日からよろしく頼む・・・」

そう言っって・・・転入生は、一礼する。クソ〜〜! 声もカッケエ・・・もう完全に、クールイケメンだ! 彼奴!!??

女子生徒達：『き・・・』

「きゅ〜」

あつ・・・これ、あれだ。よし! 耳、ふ〜〜さ〜・・・

女子生徒達：『キヤアアアアアアッ!!!』

「!?!」

女子達の歓声で、驚く転入生・・・

女子A：「すごい! 滅茶苦茶、イケメン!!」

女子B：「しかもクールで、守ってくれそうな人だ!」

女子C：「女の子に産んでくれて、ありがとう！お母さくくくん!!」（号泣）

腐れ女子：「馬神くん?!木場きゅんで、決まりね!」

腐れ女子達『異議なし!』

取り敢えず・・・女子達には、かなり好評みたいだ・・・

（まあ・・・後半の内容は、さて置き・・・）男子達はというと・・・

男子生徒A：「クソ！イケメンかよッ!？」

男子生徒達B：「この世に、神はいないのか!？」

男子生徒C：「ウゾダドンドコドーン!」

男子生徒D：「畜生めッ!!?」

俺以外、男子共が悔しがっていた・・・。

「静かにしろくくく!馬神の席は・・・窓際が一番後ろの席だ。」

先生の言葉に頷いて、自分の席に向かう転入生・・・って言うか、俺の隣じゃねえ

か・・・嫌だなくくく

「少し、良いか?」

すると・・・クールイケメン野郎が、話かけてきた。

「んだよ・・・」

俺は、機嫌悪そうに答えた・・・。

「……すまない。」

「……へ？」

突然、クールイケメン野郎が謝ってきたから……俺は、惚けてしまった。

「なっ、何で……謝るんだよ……。」

「いや……何か嫌われる事したんじゃないかと思つて、な……。」

「っ！」

そうだ……こいつは、何も悪くないじゃないか！ただ、俺が一方的に嫌つてるだけだ……こいつは、イケメンだけど……スツゲー！いい奴なんかじゃないか！

「あ……お前は、何も悪くねえよ。気にすんな……！」

「……そうか？」

「あっ！俺、兵藤一誠つて言うんだよろしくな！」

「俺は、馬神弾だ。よろしくな、兵藤？」

「イツセーで良いぜ！」

「ふっ、分かった……。だったら、俺の事もダンつて呼んでくれ。」

「おう！よろしくな、ダン！」

「ああ！こちらこそよろしくな、イツセー。」

こうして俺は、ダンと仲良くなったのだった……。

|||イッセルサイド

|||END|||

第3話 「友の死：ダンの決意！」

【第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス】

第3話

「友の死・・・ダンの決意！」

ダンが駒王学園に転入して、数日経つのであった。その時に・・・怪我をした黒猫を拾い、お世話をした。さらに、その黒猫は・・・悪魔という事が判明する。そのことが分かり、黒猫に聞くと・・・黒猫が、ダンを警戒してしまったのだった・・・。ダンは、敵ではない事を話すと・・・黒猫の警戒は薄れたのだった・・・。ダンは、黒猫が落ちていた事に確認すると、怪我をした事を聞いた・・・黒猫はダンを信じて、少しずつ話始めた・・・まず、自分の名前は黒歌と言う・・・両親が死んで、妹を守りながら生きてきたと言う・・・前の主が、酷い奴だったという事・・・そして、彼女は妹の為に・・・主を殺し、はぐれ悪魔になった事・・・そのため、追ってから逃げる時に怪我を負った事・・・黒歌は、涙目ながらも・・・ダんに話した。それを聞いたダンは・・・怒りで、握っていた拳に力を入れた。そして、黒歌を抱き締めながら頭を撫でて・・・黒歌

を慰める。黒歌は、溜まっていた感情を出しながら泣き出したのだった。暫くして……黒歌は泣き止むと、ダンは「行く宛てが無いなら、ここに居て良い」と言う。その言葉に甘えて、黒歌は……ダンの家に住むのだった。ただし……ダンの優しさに惚れて、黒歌の猛烈なアピールがあつたと言う……

現在、黒歌のアピールを受けたダンはと言うと……

「……ZZZZ」

学校の屋上で、お昼寝タイムを満喫していた……

「……だ……ん……」

「……ん？」

誰かに、呼ばれる様に……ゆっくりと瞼を開けるダン。

「……起きてください、先輩……」

「……塔城？」

ダン は 相手 を 確認 して、苗 字 で 呼 ぶ……因 みに、小 猫 と は 転 入 初 日 に 職 員 室 の 他 で、屋 上 で も 会 う 事 に な っ た の だ っ た。そ こ で……お 互 い に、自 己 紹 介 を す る 事 に な っ た。そ こ か ら、色 々 話 し て い る 内 に 仲 良 く な っ た の だ っ た。

「もうそろそろで、昼休みが終わりです・・・。」

小猫は、相変わらずの無表情で・・・ダんにそう言う。

「すまない、起こさせてしまったな・・・。」

ダンは、申し訳なきように言う・・・。

「いえ、気にしてません。それに・・・懐かしい匂いだったので、私的には・・・(ボソ)」

小猫は、最後に・・・小さい声で言う。

「ん?なんか言ったか?」

「いえ、何でもありません・・・。」

小猫は何もなかったようにする。

「そうか・・・じゃあ、俺はもう行くよ。起こしてくれて、ありがとな?」

そう言って、屋上から離れて行った・・・。

「先輩の体から匂ったのって・・・ううん、気のせいのはず・・・」

小猫そう言って、屋上から居なくなるのだった。

そして、午後の授業も終わって帰る準備をし・・・暫くしてから、教室から出て行くのだった。

「そう言えば・・・イツセーと元浜と松田が直ぐにいなくなっていたな?まさか、彼奴等・・・。」

ダンが、帰る準備をしてる時に・・・3人の姿がいなかった事に気付くと、3人のやる事に分かった様だ。

そして・・・

剣道女子1：「待て〜〜！その、変態三人組〜〜!!？」

「はあ、やつぱりな・・・」

ダン、剣道部の女子生徒の声が聞こえると・・・頭を抱えて、ため息しながら言った。

「うおおおー！逃げろー！」

「エロ坊主」と「セクハラパパラッチ」の異名を持つ・・・松田が叫ぶ。

「くそっ！見つかったのはイツセーの所為だぞ!？」

もう一人は、メガネをかけた男子生徒・・・元浜が、一誠に攻める。異名は「エロ眼鏡」と「スリーサイズカウンター」

「ぶざけるな！俺は覗いてもいないんだぞ!？」

三人目は、原作キャラの主人公の一誠で・・・二人にキレていた。因みに・・・一誠の異名は、「欲望の権化」と「性欲の塊」である・・・。

「あ、馬神くん！その覗き犯を捕まえて!!」

一人の女子生徒が、ダンに呼び掛けた。

「どいてくれ!ダン!!」

「・・・」

ダンは、一誠を通して・・・後の、元浜と松田に鞆で殴った。

「うごっ!!」

二人はそのまま倒れた。

「ありがとう、馬神くん!後は、その性欲魔だけね!」

「覚悟しなさい・・・えっ?馬神くん!」

しかし、一誠を庇うようにダンが立つ・・・

「悪いが、イツセーだけは許してくれないか?」

「だ、ダン!」

ダンの言葉を聞いて・・・一誠は、涙目になった。

「えっ!でも、コイツは!」

一人の女子生徒が一誠を睨みつける。

「皆はさつき、覗き犯を捕まえてくれて、言ったよな?」

『う、うん・・・』

「けど、さつき・・・一誠だけは、覗いていないと言っていたんだ。それに・・・イツセー

が、嘘をついている様には思えないんだ。もし、一誠が覗きをしたなら……その二人と一緒に、鞆で殴っていたさ……」

「(ま、マジか?!? 良かった、覗かなくて……少し後悔は、あるけど……)」
「だから、コイツだけは許してくれないか?」

『……』

剣道部の女子生徒達は、暫く考えて……

「分かりました……その、性欲魔の事は馬神くんに免じて許します……。皆さんもそれでいいですね?」

『はい、部長!』

剣道部の部長がそう言うのと、部員達は頷いた。

「と言う事で……その性欲魔!」

剣道部部长は、一誠に指を差した。

「は、はい!」

一誠は呼ばれた瞬間、返事と共に背筋を伸ばした。

「今日の事は、許してやる……ただし!」

剣道部部长は、竹刀を一誠に向けて続けた。

「もし、また同じ事をしたら……容赦しないからな? いいな!」

剣道部部长は、殺気を出し・・・一誠を睨みつけた。

「はいっ!」

「・・・それじゃあ、馬神くん。私達は、その二人に罰を与えるからここで失礼するよ・・・。」

さつきとは? 打って変わって、優しい顔でダンの方を向いて一礼した。

「ああ。部活、頑張ってくれ・・・他の皆もな。」

『ありがとう、馬神くん!』

「それでは、失礼する・・・。」

剣道部達は、元浜と松田を引き摺って行き、その場から離れていった。

「・・・それじゃあ、帰るぞイツセー。」

「お、おう・・・。」

二人はそのまま帰って行った・・・。

帰り道にて・・・

「イツセー、これに懲りたら・・・覗きはするなよ?」

「お、おう・・・暫くは辞めるわ・・・。」

「・・・はあ、出来ればやめて欲しいんだけどな・・・。」

ダンは、ため息しながら・・・一誠に言った。

「そ、そう言えば！ダン、今週の休みはどうするんだ？」

話を逸らすように、話題を変えた。

「(逸らしたな．．．) いや、特にないが．．．」

ダンは、話題を逸らされたことに気付くが．．．一誠の問いに答えた。

「そっか！なら、俺の家に遊びに来いよ！」

「イツセーの家に．．．？」

「ああ、俺の両親が「会いたい！」って言ってさ．．．駄目か？」

一誠は、ダンに聞いてくる。

「ああ、大丈夫だ。」

「そうかくくなら、今度の休みに！」

「わかった．．．」

「じゃあな、ダン。」

一誠と別れて、家に帰るダン。

———ダンの家———

「ただいま．．．」

家に着いたダンが、そう言う．．．玄関を開けて入る。すると．．．

———足音———

足音が近づいて来て・・・

「お帰りにや!ダ・ア・リ〜ン〜♪」

浴衣姿に、黒髪に黒い猫耳がある・・・巨乳の女性がダんに飛び付いて来た。

「・・・ただいま。だけど、いきなり飛び付くのは危ないぞ?黒歌・・・。」

「にやはは、それでも・・・ちゃんと、抱きとめてくれるでしょう?ダーリンは♪」

「それでも、危ないことには変わらないだろう?後、ダーリン言わない。」

「にやにやにやつ!冷たいにやダーリンは・・・あんなに強く抱き締めた癖に・・・酷い
にや。」

「・・・はあ、とりあえず・・・離れてくれないか?入れないんだが・・・。」

「仕方ないにや〜〜。」

そう言って、離れた。

「そう言えば、ダーリンの制服から白音の匂いがしたにや・・・」

「塔城の事か?」

黒歌に妹の事を聞かされたダンは、ふと小猫の名前を言った。白音とは、塔城小猫の昔の名前である。前に、黒歌が抱き付いた際に「妹と同じ匂いがする・・・。」と言っていた事に転入初日に会って、仲良くなった子だと言うと・・・黒歌は驚いて、涙を流した・・・。ダンは泣いている黒歌に妹さんの事を聞く・・・。更に、妹さんの特徴を聞

いてみると・・・特徴が一致した事にダン自身も驚いていた・・・そして、黒歌は、ダンに自分の妹を見守って欲しいと願うと、ダンは分かったと言い・・・黒歌は、安心するのだった。

そして現在・・・

「ところで・・・白音は、どうだったにや?」

ダンに妹の事を聞く。

「元気にしてる・・・部活も頑張っているらしい。」

「そう・・・良かったにや・・・」

黒歌は、安心するように胸を撫で下ろした。

「何とかしないとな・・・」

ダンはそう思ったのだった。

「それじゃあ、着替えてくる・・・」

「了解にや～～～!」

そう言つて、ダンは自分の部屋に戻つて行き・・・黒歌はリビングに入って行つたのだった。

「ダン、学園に行く最中・・・」

「おいしい! ダン~~~~!!」

後ろから、ダンの呼ぶ声がしたので振り返ると・・・

「よう、ダン!」

「イツセーと・・・誰だ?」

「ダン、声の主が、分かったのは良いが・・・もう一人の少女に首を傾げた。」

「おう、紹介するぜ! 俺の彼女・・・天野夕麻ちゃんだ!!」

と、自信満々で紹介した・・・。

「天野夕麻って言います! よろしくね?」

彼女はそう言って、頭を下げた・・・。

「(この子・・・) あ、ああ・・・よろしく、馬神弾だ。」

「ダン、彼女から違和感を感じ取りつつも自己紹介した。」

――翌日――

「どうだ、ダン？驚いただらう〜〜？」

「あ、ああ．．．驚いているが、良かったなイツセー．．．彼女が出来て．．．。」

「おう！」

「天野．．．だったか？イツセーの事、頼んだ。コイツは、優しい奴だけど．．．調子に乗りやすい奴だから頼む．．．。」

「ふふふ、はい！任してください!!」

「じゃあ、イツセー．．．俺は、先に行ってる。」

「へ？いや、一緒に行こうぜ？」

「はあ．．．彼女と行くんだろ？なら二人つきりの方がいいだろう？」

「お、おう．．．サンキュー、ダン．．．。」

「気にするな．．．じゃあ、先行ってる．．．。」

ダンはそう言つて、その場から去つて行つた。

《《マスタター．．．》》

すると、シエリアが念話をしてきた。

「〔シエリア．．．彼女つて、人間じゃないよな？〕」

《《はい、彼女は．．．墮天使です。》》

「墮天使・・・何故、墮天使が此処に？」

《それは・・・分かりません。》

「そうか・・・何もなければ良いんだが・・・。」

ダンは、そう思つて・・・足を早めた。

学園に着いて、自分の教室に入り・・・席に座る。それから、暫くして・・・元浜と松田が涙を流しながら、一誠をボコボコにすると言う事が起きて・・・今日の学園は変わった感じで始まったのだつた・・・。

————自分の部屋————

学校が終わつて、家に帰つたダンはベッドで横になる・・・暫くして、ケータイから着信音が流れ、見てみると・・・一誠だつた。

「イツセー? どうしたんだ、こんな遅くに・・・」

『悪い、ダン! デートプランと一緒に考えて欲しい!!』

一誠は、慌てた感じで・・・そう言った。

「・・・とりあえず、落ち着け。」

ダンは、落ち着かせるように一誠に言った。

『す、すまねえ・・・。』

「彼女とデートするの?」

『あ、ああ・・・今週の日曜日にな。』

「そうか・・・(彼女が、墮天使って事は・・・イツセーには、話せなれないな・・・。)」

ダンは、天野夕麻の正体を一誠には言わない事にした。

『どうした、ダン?』

一誠は、急に黙ったダンに声をかける。

「いや、何でもない・・・デートプランだよな? すまない・・・俺、そう言うの分からないから力になれないかも・・・。」

『いや、無理な事を言ったのは俺だから・・・気にするな! しかし、どうしたものか・・・。』

「そうだな・・・イツセーは何かないか?」

『いや、一応・・・ゲームセンターとか、色んなお店を周るってな感じだな・・・。』

「何だ、良いプランじゃないか？」

『へ？そうか・・・？』

「店を見ながら、話をしたりして・・・最後に公園とかに行つて・・・夕日を見るつて感じていいじゃないか？」

『おお！ナイスアイディアだ!!ありがとう、ダン!』

「気にするな・・・デート頑張れよ？」

『おう！それじゃあな!!』

そう言つて、一誠は通話を切つた後・・・ダンは考える。

《・・・マスター?》

「いや、何でもない・・・今日は休む・・・。」

《分かりました・・・お休みなさい、マスター。》

シエリアと話した後・・・ダンは目を閉じてそのまま眠りついた・・・。

土曜は特に変わらず・・・ダンは家でデツキを構成したり・・・黒歌のアプローチを受けたら、あまり変わらない1日だった。そして・・・一誠のデート当日、夕方になる前にダンは私服に着替え・・・一誠のデートの様子を見に行くことにしたのだった。

「これで、よし・・・黒歌、少し出てくる・・・。」

「分かったにやゝ気を付けて、行つてくるにやゝ。」

黒歌は、キッチンで料理をしている最中に・・・ダンから外に出る事を伝えられ・・・答える、黒歌。そして、ダンはそのまま家を出た・・・。

——— 一誠 side ———

よう、皆！彼女が来てテンションMAXのイツセーだ！

現在・・・夕麻ちゃんとデートするため、待合場所に10分前から待つている俺・・・早く来ないかな~~~~~と思っている・・・

「お〜い！イツセーく〜ん!!」

夕麻ちゃんが手を振りながらこちらに走ってきた。

「ごめ〜ん！待ったかな・・・？」

可愛らしく聞いてくる・・・やっべー！めっちゃカワイイぜ!!

「イツセーくん?」

「・・・あつ、いや!俺も今来た所だからさ!」

「そうなんだ・・・じゃあ、早く行こう?」

「おう!」

そして、俺は・・・考えたデートプラン通りに始めたのだった・・・。最初は色んなお店を回ったり・・・服屋など女の子やカッパルが行く所を周っていた。そして、昼に喫茶店に入って食事して・・・昼からゲームセンターに行って楽しいデートを充実した。そして、最後にダンからのアバイスで公園にきていた。丁度、夕方になる時間になろうとしていた。

「今日は、楽しかったね。」

公園の近くにある、噴水をバツクに微笑む夕麻ちゃん。

「ねえ、イツセーくん。」

「なんだい、夕麻ちゃん。」

「私たちの記念すべき初デートってことで、ひとつ・・・私のお願いを聞いてくれる?」

「な、何かな?お、おっ願いつて!」

ああああつ!つい、テンパっちまった!!

しかし、夕麻ちゃんは微笑んだ後・・・はつきりと俺に向かって・・・

「死んでくれないかな？」

そう言った……。へ……？

—— 一誠 side out ——

一誠が、目をパチクリさせて苦笑いしながら……

「ご、ごめん……。夕麻ちゃん。何て、言ったのかな？」

「死んでくれないかな？」

そう言うのと、天野夕麻の背中から羽が生えてくると……

着ていた服が変わって、エロくてセクシーな姿になった。そして、光の槍を出して……

—— グサッ ——

「……え？」

一誠は、ゆっくりと下を見ると……光の槍が一誠のお腹に刺さっていた。

「……がはっ！」

一誠は吐血をする。

「……ごめんなさい。」

夕麻は悲しい顔をしながら、光の槍に刺さってる一誠に謝罪する。

「夕……麻……ちゃん……ん……。」

一誠は、彼女の名前を言い・・・倒れた。

「これで、終わりに・・・。」

彼女は、光の槍を構え・・・一誠を消し飛ばそうとする。

「やめろ、天野・・・。」

「っ!？」

彼女は声のした方を見ると・・・私服姿のダンが立っていた。

「貴方は、イツセーくんの友達なの・・・。」

彼女は、ダンを見て・・・信じられないという表情になる。

「もうやめろ・・・。」

ダンも、彼女にやめるよう伝える。

「・・・何で?何で、人間の貴方が・・・何で、此処にいるの・・・?此処には、結界が

張っている筈よ?」

しかし、彼女は・・・聞き入れず、ダンが此処に居る事に信じられないでいた

「・・・。」

ダンは、その問いに答えず・・・只々、彼女を見つめる。

「見られたからには・・・殺すしかないわね・・・。」

彼女は、そう言って・・・手に持っている光の槍を、ダンに向けた。

「……何故、イツセーを殺した？」

「それは……彼の中にある神器（セイクリッド・ギア）が、危険だったからよ。」

「……それで、殺したのか？」

「……ええ、そうよ。」

「……イツセーは、このデートを楽しみにしていた。」

ダン は 淡々と語る。

「そう見たいね……。」

「初めて、彼女が出来た！……って、喜んでいたいんだ。その時、デートプランを必死に考えていたんだぞ？」

「……らしいわね。ご苦勞な事ね……初々しかったわ……まあ、私に取っては……
“お遊び程度”には、丁度良かったわ……。」

「……」

「もういいでしょ？ 貴方もイツセーくん同様に殺してあげる！ 恨むんだったら……自分の不幸を呪いなさい！」

彼女は、光の槍を持ちダンに迫り……

「死になさい！」

「……」

刺そうとする・・・

「なっ!?!」

しかし、光の槍は・・・

「……………」

ダンが握り締め、槍を止めた。

「あ、あり得ない・・・堕天使の光の槍が、人間に止められる何て……………」

「何故……………」

「えっ……………」

「何故、本当の気持ち隠そうとする……………」

「な、何言ってるの?」

「お前の、槍からは・・・悲しみ、後悔、罪悪感、それと……………」

「……………」

「イツセーに対する思いが……………伝わって来た。」

「っ!?!」

その言葉を聞いた瞬間、持っていた槍を手放して……………ダンから距離を取った。

「な、何を……………っ!?!」

すると、夕麻は何かを感じ取るのだった。

「つく！今日は、これくらいにしてあげる！もし、次・・・会うことがあったら必ず、殺してあげる!!覚悟しなさいっ！」

それだけ言つて、彼女はその場を去つた・・・。

「・・・行つたか。」

ダンが、夕麻が行つたのを確認すると・・・

《ツ！マスター、此処に何か来ます！》

シエリアが、何かを察知し・・・ダンに伝えたと、一誠の倒れている近くで・・・魔法陣が現れ・・・紅い髪の少女が現れた。

「貴方ね？私を呼んだのは・・・。」

彼女は、一誠を見ると・・・そう呟いた。

「リアス・グレモリー・・・。」

ダンは、目の前の少女を見て・・・名前を呟いた。

「あら？私の事が、分かるのかしら・・・。って、貴方は？」

「それより、イツセーは・・・。」

「・・・死んでるわ。」

「・・・そうか。ごめん、イツセー・・・。」

ダンは、一誠に謝る。

「でも……………」

彼女は、続けて言葉を発した……………。

「生き返らせる事は出来るわ……………これだね。」

そう言つて……………谷間からチェスの駒を取り出し、ダンに見せた。

「それは？」

ダンは、リアスと言う少女に聞く。

「これは、悪魔の駒（イーヴイル・ピース）……………これで、この子を悪魔に転生させるわ……………」

「イツセーを……………悪魔に……………」

ダンはそれを聞いて、目を瞑る。

「受け入れたくはないかもしれないn」それを、やれば……………イツセーが蘇るんだよな?」……………

「そうよ。」

「なら、頼む……………イツセーを助けてやってくれ！」

ダンは、少女に頭を下げ、頼んだ。

「……………いいの?彼は、悪魔……………人では無くなるのよ?」

「大丈夫だ……………イツセーは悪魔になつても……………イツセーは、イツセーだからな。」

ダンは、そう言つて……………微笑んだ。

「そう……………分かつたわ。」

「それじゃあ、俺は帰ります．．．家族が心配しているので．．．」
そう言つて、歩き出すダン。

「．．．それより、貴方は？」

「．．．アンタなら、分かるはずだ。もし、知りたければ：塔城に聞いた方がいい．．．。
同じ部活の、メンバーだろ？」

「ツ!? 貴方、小猫が言つていた．．．。」

少女は、驚き．．．そして、思い出した。

「失礼する．．．。」

そう言つて、歩き出した。

「あつ! 待ちなさい!」

しかし、少女の呼び掛けを無視して歩き去つた．．．。

「．．．。」

公園には、彼女と大怪我をした．．．一誠だけが残されていた。

――ダン side ー

俺は、公園を去り．．．家に帰つて行つた。家に入ると黒歌が泣きながら、抱きついてきた．．．その後、墮天使にあつた事．．．自分の友人がその墮天使に殺された事．．．そこで、この街を管理しているグレモリー先輩にあつた事．．．グレモリー

先輩が友人を悪魔に転生させると言う事・・・この事を、黒歌に話した。黒歌は、それを聞いた途端立ち上がり、俺を強く抱きしめた・・・何故、抱きつくのか、聞いてみたら・・・「ダーリンが、辛そうな顔をしているからにや・・・」って言ってきた。

・・・そんな、顔をしていたのか？自分では、分からなかった・・・それから暫くして、黒歌は離れて・・・食事の用意をして・・・俺たちは、夕食を食べ始めた・・・。しばらく経って、俺はお風呂に入り・・・ベッドに入った。そして、次は・・・イツセーを死なせないと・・・

何があっても、友人を助けると決意して瞼を閉じて・・・眠りについた。

。。。彼女も、何か抱えてる・・・だから、天野も助け出してみせる！
そう意気込み、意識を手放した・・・。

。。。ダン side out。。。

。。。END。。。

第4話「新たな力、復活の太陽龍！」

【第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス】

第4話

「新たな力、復活の太陽龍」

—— 一誠side ——

よう、皆……イツセーだ……。え？元気がないだつて？なんか……リアル過ぎる夢を見た所為なのか、体がだるいんだよな……。昨日、確かに……夕麻ちゃんとのデートして……その後、夕麻ちゃんの姿が変わつて……羽が生えて……長い武器を持つて、俺を刺した……。つて言う夢を見た……。確かに、あの痛みは妙にリアル過ぎるよな？それで、目を覚ますと……自分のベッドで、寝ていた……。ホント何だつたんだ？それに、携帯に撮つてあつた夕麻ちゃんの写真が消えていたし……。ホント、意味分かんねえ……。それに、松田と元浜に夕麻ちゃんの事を聞くと知らないつて言うし……。ダンのは、まだ来てないし……。どうしたんだよ、ダンのは……。

—— チャイムの音 ——

うげっ! HRのチャイムが鳴っちゃたし!! ホントにダンの奴、どうしたんだよ!?
「静かにしろくくくく．．．HRを始めるぞくくく。」

女子生徒2:「あのく先生．．．馬神くんが、来ていませんくくく。」

「あー．．．馬神は、今日は休むと言っていた．．．。」

なっ! マジかよ!?

「それじゃあ、HRを再開するぞくくく!」

そう言つて、HRが始まった．．．本当に、ダンの奴どうしたんだよくく

——— 一誠 side out ———

一方、ダンはと言うと．．．

「はあ．．．はあ．．．出来た．．．。」

部屋に结界を張つて、神器の特訓をしていた．．．。

《．．．マスター、遂に完成しましたね!》

「ああ、禁手(バランス・ブレイカー)を出来たのは良いが．．．余り、長持ち出来ないな。」

禁手(バランス・ブレイカー)．．．神器の力を高め、ある領域に至った者が発揮する力の形である．．．。

《それでも、この短期間で．．．禁手をモノにしたのは、凄いと思います。本来は困難な

為・・・禁手に至る者などいらないと言っていいでしょう。後は、禁手の使用時間を長持ち出来るように頑張らしましょう!」

「ああ、分かった・・・。シエリア!」

《はい、何でしょう?》

「これからも、よろしくな?」

《・・・はい!》

「とりあえず、部屋に張ってある結界を解除してくれ。」

《分かりました・・・。》

シエリアは結界を解除させると、通常の部屋へと戻った。

《ですが、マスター?今日は仕方なく、学園を休んだのですから・・・明日はしっかりと登校して下さいね!》

「あ、ああ・・・。」

シエリアの注意され、引き攣るダン。そして、部屋を出て

リビングに向かったのだった。

ーーーーリビンググーーーー

「にゃ?特訓の成果は、どうにゃ?」

ダンがリビングに入ると黒歌がソファーに座って、ダンの方を向いて・・・特訓の事

を聞いてきた。

「ああ、とりあえず・・・禁手を出せる事まで、出来たよ。」

「にやつ!? 凄いにや! 流石、私のダーリンにやつ!!」

「黒歌・・・とりあえず、そのダーリンって言うのを止めてくれないか?」

「イヤにゃ♪」

「はあ・・・。」

黒歌の拒否にため息をするダンであった・・・。

——— 一誠 s i d e ———

俺だ! イッサーだ!! 今、羽の生えた男に追われているんだ!! 夕麻ちゃんの事を調査する為・・・学校が終わって、例の公園に来ていたんだが・・・黒い帽子を被って、黒

いスーツを着た男が俺に訳分からん事を言った途端……背中から黒い羽が生えてきたんだ！あの羽……夕麻ちゃんと同じ!? ツ!? まさか、あの時の夢は……現実だったのかよ!!?? クソツ！何が、どうなってるんだ!?

「逃げられると、御思いかね?」

「っ!?!」

俺は声のした方を見ると、俺のすぐ後ろにいた！うげっ！マジかよ!?

「これでも喰らうがいい……フン!」

——ザクツ!——

「がッ!?!」

投げた槍みたいなモノが、俺の背中を貫いた！痛い！熱い！体が焼ける！何だよこれ!?!俺は、そのまま倒れそうになるが……何とか、力を入れて……体を支えた。うっ！意識が……

「フム、一回では仕留めきれなかったか……だが、この一撃で楽に死なせてやろう……。」
 そう言つて、目の前まで飛んできて槍みたいなのを投げてきた。

——ビュン!!?——

ああ、俺……此処で、死ぬのかな……? どうせ、死ぬなら……あの紅い髪先輩のオツパイの中で、死にたかったな……俺は、そう思つて目をつぶった。

「フラッシュタイミング!マジック、デルタバリアを使用!!」

「……キュイン!キュイン!キュイン!……」

音が聞こえたので、目を開けて見ると……

「何ッ!?!」

「何だ……これ……」

男が驚いていた。俺も、目の前にある光景に驚いていた。それは……ゲームに、良く出てくる魔法陣が三つ現れて、その魔法陣三つを線で繋げ……三角形になった。

「……バババババッ!……」

そして、槍モドキとぶつかって……

「……パライイイイン!!……」

槍モドキは消滅した……た、助かったのか?

「くっ!?!貴様、何者だ!!?!」

男が、俺の後ろの方に指を差した。すると……誰かが、俺の肩に手を置いた……俺は振り返って見ると……

「……大丈夫か、イツセー?」

そこには……今日、学校を休んだ。俺のダチ、ダンが……いたのだった。

「……一誠side out……」

俺は、今……イツセーの肩に手を置いて、安否を確認した。

「ど、どうして……ダンが、此処に？」

イツセーは、俺がいる事に驚いていた……。

「……イツセーこそ、何で此処にいるんだ？」

俺は、イツセーに聞いた……。

「お前は……夕麻ちゃんの事、覚えているか？」

すると……イツセーは自分の彼女だった天野の事を俺に、聞いてきた。

「……どういう事だ？」

俺は意味が分からず、イツセーに聞き返した。

「頼む、ダン……。覚えてるか、覚えてないかだけで良い……答えてくれ！」

イツセーは、必死になって聞いてくる。

「……覚えていても何も、一緒にデートプランを考えていただろ？」

「ツ！そ、そうか……。やつぱり、夕麻ちゃんは……いたんだ。」

そう言つて、嬉しそうに笑う。

「とりあえず……話は、後にしよう。」

俺は、イツセーにそう言つて……墮天使の方に向いた。

「何故、人間が此処に? まあいい……そこのはぐれ悪魔と一緒に、消し去ってくれる!」
そう言つて、墮天使は光の槍をこちらに向けた……。

「ダン! 俺を置いて、逃げろ!!?」

イツセーは、そう叫んだ。

「それは、出来ない。」

「つ!? けど! このままだと!!?」

「それに……友達を置いて、逃げるわけにはいかないだろう?」

「つ! ダン……」

「だから、イツセー……此処は俺に任せろ!」

そう言つて、ネットクレスを握る。

「行くぞ! シェリア!!?」

《はい、マスター!》

俺はそう叫ぶと、シェリアが応え……ネットクレスが光出す。俺は……未来のバトルフィールドで、装着したバトルフォームの姿になるのだった……。

……ダン side out……

「……」

ダンは、無言で墮天使の方を見た。

「そんな、鎧を着けたところで……貴様の死ぬ事には、変わらんぞ！」
そう言って、墮天使は光の槍を構えた。

「だったら見せてやる……俺の戦い方を！」

そう言うと、ダンはデツキケースからカードを一枚出し

「太陽よ、炎をまといて龍となれ！太陽龍ジーク・アポロドラゴン!!？」

「グオオオオオオツ!!？」

ダンは、そう言うと……カードからジーク・アポロが現れて、咆哮をしながら炎を纏うようにして……ダンを包み込んだ。

「ダン!？」

一誠は、それを見て驚く……。

「何だ!?!何が起きている!!?!」

墮天使は、訳が分からないでいた。

—————グオオオオオオツ!!!!—————

ジーク・アポロが吠えると同時に、炎が消える……そして、そこには太陽龍ジーク・アポロドラゴンをモチーフにした鎧に……ボディには、バトルフォームをアーマーにしている馬神弾の姿があった。(全身鎧で身を纏った状態)

「スゲエ……. かつけえよ、ダン。」

一誠はダンの姿を見て、見惚れる……。

「なっ!? 神器持ちの人間だと!!?!」

墮天使は、ダンの姿を見て驚くのだった。

【行くぞ……墮天使!】

すると、ダンは何凄く速さで飛んで……墮天使に近づいた。

「なっ!? ガハッ!」

そして、ダンの攻撃を喰らって……地面に叩きつけられた墮天使……。

「す、すげえ……。」

一誠は、ダンの強さに只々驚いていた……。

【……もう、終わりか?】

ダンは、挑発する様に……墮天使に向かって、そう言った。

「ぐっ! 舐めるなああつ!!?!」

墮天使は怒りくるように光の槍をダンに投げた!

「ツ!? ダアアアン!」

一誠は叫ぶ。だが……。

【心配するな、イツセー……フンツ!】

——パライイイン!!? ——

光の槍は、ダンの手（鉤爪）によって・・・無惨に砕かれた。

「な、何だと・・・。」

墮天使は、それを見て・・・目を見開き、驚いた。

【「これでも、喰らえ！」】

ダンは、近づいていき・・・

————バキツ————

「ガッ!？」

尻尾で、墮天使を叩（はた）いた。

————ドゴオオオオン!!?————

「ゴハッ!？」

その衝撃で、木にぶつかったのだった。

「ぐっ!？」

墮天使は・・・ゆらゆらと立ち上がり、ダンを睨みつける。

次の瞬間・・・

————キユイイイン!!?————

赤い魔方陣が現れ、そこから・・・

「・・・これは、どう言う状況?」

紅い髪の少女……リアス・グレモリーが、今の状況を見て、首を傾げた。

「ツ!? 紅い髪の悪魔……グレモリー家の身内か!」

墮天使は、そう言う……視線をダンからリアスの方に向いた。

「御機嫌よう、堕ちた天使さん? ……それにしても、ボロボロね。」

リアスは、墮天使の方を見て……そう言った。

「くっ! ……その、神器持ちの人間にやられたのだ……。」

墮天使は、顔を顰めて……鎧を着たダンの方に指を差して言う。リアスは、墮天使の言葉を聞いて……鎧を着けた人物（ダン）を見た瞬間……

「……貴方、何者?」

目を細め……リアスは、警戒態勢をとりながらそう言った。

【昨日振りだな……グレモリー?】

ダンはリアスに、鎧越しで声をかけた。

「っ! その声!? そう、貴方……神器持ちだったのね?」

【ああ……だが、詳しい話は後だ。今は……】

ダンは、墮天使の方に視線を向ける。

「……そうね。」

リアスは、視線をダンから墮天使へと移す……

「悪いけど……その子は、私の眷属よ。だから、ちよつかいを出さないで頂戴。」
リアスはそう言つて、墮天使を睨む。

「そうか……今回は詫びよう……だが、下僕は放し飼いにしない事だ。私のような者が、散歩がてら狩つてしまう事もあるやもしれんぞ……？」

「ご忠告、痛み入るわ……でも、私の邪魔をするならその時は容赦しないわ。」

「その台詞、そのまま返そう……それと、その人間。」

墮天使は、ダンを指差した。

「……何だ。」

「貴様の名前を聞いてこう……。」

【ダン……馬神弾だ。】

「私は、ドーナシック……馬神弾よ、この屈辱は必ず晴らす！首を洗つて、待つておけ!!？」

墮天使……ドーナシックは、ダンにそう言った。

【いいだろ……俺は、逃げも隠れもしない。全力で、お前を倒す！】

ダンも受けて立つように応えた。

それを聞いて、ドーナシックは去つて行った……。

それを確認して、武装を解くダン。

「た、助かった……。」

一誠はそう言つて、倒れた。

「ツ!? イッセー!」

ダンは、慌てて駆け寄つた。

「大丈夫、気絶してただけよ。」

リアスは、ダンを安心させる様に優しく言う……。

「そうか……良かった。」

ダンはその聞いて、安心した。

「さて、貴方の事……詳しく聞きたいのだけれど?」

「それは、明日にしよう……イッセーを家に運ばないと。」

「……分かつたわ。それと……明日、使いを出すからこの子と一緒に来て頂戴。後……

大丈夫よ。この子は私が責任持つて、家に送り届けるわ。」

「分かつた……。それから、すまない……。イッセーの事は頼む。」

ダンは了承した後……。リアスに頭を下げて、一誠の事をお願いした。

「ふふふ、分かつたわ。あつ、それから……。」

リアスは、思い出すかのように言葉を続ける……。

「明日、覚悟しといた方がいいわ。」

「???

リアスの言葉を聞いて、首を傾げたダンだった……。。

―――END―――

〈第5話「ようこそ、オカルト研究部へ!」〉

【第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス】

〈第5話

〉

「ようこそ、オカルト研究部へ!」

「……イツセーside……」

よう、皆! イツセーだ!!? 今、駒王学園の二大お姉様の一人……リアス・グレモリー先輩と一緒に登校していた。

何故、グレモリー先輩と一緒にいるかと言うと……今朝起きた時隣で寝ていたのだ! 全裸で!!? その後、色々あつて……こうして一緒に登校しているのだ……。

「ツ!? ダン……!」

すると……壁にもたれているダンを見て、驚きながらもダンを呼んだ。ダンも気が付いてこつちを向いた。

「元気そうだな……おはよう、イツセー……。」

「ダンはそう言つて……微笑んだ。」

「あら、おはよう．．．馬神弾君。」

グレモリー先輩も、ダンを見て挨拶をする。

「ああ、おはよう．．．グレモリー。」

ダンも、グレモリー先輩に挨拶をする．．．つて！敬語しろよ、ダン！！？

「貴方．．．一応、後輩なんだけど．．．。」

「．．．すまない。あまり、こういう事に慣れてないんだ．．．」

「はあ．．．仕方がないわね。」

グレモリー先輩は、苦笑いしながらそう言った。

「それじゃあ、馬神君も一緒に行きましょう？」

グレモリー先輩は、ダンを誘った。

「．．．いいのか？」

「何言ってるんだよ．．．良いに決まってるだろ？」

俺は即座にOKを出した。

「ありがと．．．イッセー。」

そして、俺達3人で登校していると．．．

『キヤアアアアツ！！？』

女子生徒達が黄色い歓声を上げ始めた。

「それじゃあ、放課後に使いを出すわね？」

「場所は、オカルト研究部でいいんだな？」

「ええ、それじゃあね。」

リアスはそう言つて・・・別れたのだった。

「な、なあダン・・・グレモリー先輩の入っている部活が、オカルト研究部だつて・・・何で分かるんだよ？」

「誠は・・・ダンがリアスの入っている部活を知っている事に、疑問を持つのがあった。知り合いから聞いた。」

「ダンはその言つて、教室に向かったのだった・・・。」

その後、教室に入ったダンと一誠は・・・クラスの皆（特に元浜と松田）が詰め寄つて来て、リアスと一緒に登校していたのか？つと・・・聞いただすのだった。

――イッセーサイドール

よう、皆! イッセーだ!!? やつと、放課後になったぜ! とここで……使いの人物は、誰だろうなあ……俺としては、美少女に来て欲しいぜ……。

「……来た見たいだな。」

ダンがそう言うと……。

『キャアアアアツ!!!』

「やあ、馬神君と兵藤君だね?」

チツ! イケメンかよ……。

「で、何の用だよ?」

俺は、イケメン野郎に悪態をついたのだった……。

「アンタが、グレモリーが言っていた……使いの者か?」

ダンは、イケメン野郎に聞いた。

「うん、そうだよ。」

「……そうか。」

ダンはそう言うと、鞆を持って……イケメン野郎の方に行く。

「案内を頼む……。」

「うん、分かったよ。」

「行くぞ、イツセー……。」

そう言って、教室を出たダンって！

「おい！待てよ、ダン!!?。」

俺は、ダンの後を追うように……鞆を持って、教室を出た。

俺達が、廊下を歩いていると……

『キヤアアアアツ!!?!』

やつぱり……女子生徒の黄色い歓声が、上がった。

女子A：「木場さんと馬神くんよ！」

女子B：「ホントだ！初めてのツーシヨットよ！」

腐れ女子：「やつぱり、馬神くん??木場くんね！」

あゝゝゝやつぱりこの展開か……。

女子C：「でも、待って！二人の横にあの性欲魔がいるわよ！」

げっ！見つかった!!?。」

女子D：「何で、アイツがいるのよ!!?。」

女子生徒達：「そうよそうよ!!?。」

女子S：「二人が汚れるわ！」

女子生徒達：「そうよそうよ!!?。」

やっぱり、こうなったー!!

腐れ女子：「でも、待ってこの場合は!」

あれ?なんか、嫌な予感がするぞ……

腐れ女子1：「これは、性欲魔（兵藤くん）??木場くん??それとも……性欲魔（兵藤くん）??馬神くん!?!いや、クールな馬神くんが受けじゃなくって……攻めだとする
と!」

腐れ女子2：「馬神くん??兵藤くんね!」

腐れ女子3：「違うわ!兵藤くん??馬神くんの方が良い!」

神・腐れ女子「甘いわ、皆!ここは、野獣の兵藤くんとクールな馬神くんが攻めの!

イケメン男子の木場きゅんが受けの方よ!!?」

腐れ女子達：『それだ!!!』

それだ!……じゃねエー!!!俺は、ノーマルだ!普通に美少女が好きな、男子
だ!!?

俺は心の中でそう叫んだのだった……

金髪の男子生徒は、ノックをしながらそう言った。

「ええ、入って頂戴……。」

中から返事が返ってきたので、三人は中へと入って行くのだった。

「こ、これは……。」

「凄いな……。」

室内には所々、魔法陣が描かれた為……一誠とダンは驚きながらそう呟くのだつた。

「……先輩?」

聞き覚えがある声を聴いて、ダンは辺りを見渡すと……

「……塔城?」

ソファーに座って羊羹を口にして、目を見開いている小猫の姿があった。

「えつと、塔jy「先輩!」おつと……。」

小猫がダンに突然、抱きついたのだった。それを見ていたメンバーは……

「なっ!?!」

「これは……。」

一誠は驚き、金髪の男子生徒は不思議そうに見ていた。

「えつと……と、塔城?」

ダンが訳が分からず、小猫の名前を呼ぶ。

「……しました。」

「……え？」

「心配……しました……。」

微かに震えながら、小猫はダンそう言った。

「……塔城」

「いなく……ならないで下さい……。」

「っ！」

小猫の言葉を聞いて、ダンは気づいたのだった。

「(そうだった……この子は……)」

「……すまない、塔城。」

ダンは、そう言う……小猫の頭を優しく撫でながら、慰めるのだった。

「だ、ダン……。」

体を震わせながら、ダンを呼ぶ一誠……

「どうした、イツセー？」

「お前、何で！マスコットキャラで、ロリ少女の塔城小猫ちゃんと仲いいんだよう!!？」

一誠は涙を流しながら、そう言って……ダンに詰め寄ると……

ーードゴツ!!ーー

「ゲフツ!？」

「……うるさいです。」(怒)

機嫌を悪くした小猫が、一誠のみぞおちに一撃を入れる。

一誠は、そのまま崩れ落ちて……蹲った。

「い、イツセー……大丈夫か？」(汗)

ダンは、心配して一誠に呼びかけた。

「……」

「返事がない……ただの屍のようです……」

「いや!生きてるから!？」

小猫の毒舌に、立ってツツコミを入れながら痛そうにお腹を摩る一誠……。

「と、ところで……塔城は大丈夫か?」

一誠は、もう大丈夫だと判断したダンは……小猫にも聞く。

「つ!だ、大丈夫……です／＼」

流石に、先程の行動が恥ずかしかったのか……小猫は、顔を赤くして俯くのだった。

「ホントに大丈夫か?顔が赤いぞ?」

「つ!？」

「ゴフツ!?何で、俺……?」

また、みぞおちを殴られて……蹲る一誠だった。

「……そこに、先輩がいたからです……。」

「理不尽……だ……。」

一誠は、蹲りながらも応えたのだった……。

「……先輩、座りましょう。」

小猫は、一誠をスルーしながらダンの袖を掴みながらそう言った。

「あ、ああ……。」

ダンは戸惑いながらも、小猫に着いて行き……ソファに座った（小猫の隣）。

……。

暫くして、奥の部屋から水の流れる音が聴こえたのだった。

「この音……シャワーなのか?」

ダンは、隣に座っている小猫に聞いた。

「はい……部長が、使っているんです……。」

「……そうか」

ダンは小猫の話を聞いて、そう言う……。

「部長、これを……新しいお召し物です。」

「ありがとう、朱乃。」

カーテンの向こうからリアスと別の声が聴こえたのだった。すると、着替える音に反応する一誠はと言うと……鼻の下を伸ばし、だらしな顔になっていた。

「……いやらしい顔」

小猫は、一誠の顔を見てそう言った。

暫くして……カーテンが開いて、リアスが出てきた。

「ごめんなさい。昨夜、一誠くんのお家にお泊まりして、シャワーを浴びてなかったから……今、汗を流していたの。」

リアスに続いて、別の女子生徒が出ていた。

「あらあら、初めまして……私、姫島朱乃と申します。どうぞ、お見知りおきを……。」

「こ、これはどうも!お、俺は兵藤一誠って言います!こちらこそ、初めまして!」

「……馬神弾だ。」

一誠はテンパって自己紹介をし……ダンは、普段通りに自己紹介をした。

「これで、全員揃ったわね?ようこそ、オカルト研究部へ。兵藤一誠君に馬神弾君……いえ、イツセーとダンと呼ばせてもらおうわ……。貴方達を歓迎するわ……悪魔として……。」

明と勧誘

第6話「説

【第一章旧校舎の太陽龍とディアボロス】

第6話

「説明と勧誘」

「粗茶ですわ。」

「このメンバーの一人、朱乃がお茶を淹れて……一誠やダンところに置いた。」

「……すまない、ありがとう。」

「あ、ありがとうございます！」

一誠とダンは、お礼を言うところ、朱乃が席に着き、リアスは話始めたのだった。

「さて、まず二人は昨日……黒い翼の男と出くわしでしょう？」

「あ、はい……。」

「……墮天使の事か？」

一誠は、戸惑うが……ダンは即座に昨日の人物の正体を言う。

「……やっぱり、貴方は知っていたのね？」

リアスは、ダンが墮天使の存在を理解していた事に確信する。

「ああ、アンタと初めて会った時に・・・出会った。」

「そう・・・。」

「あ、あの～～～墮天使って、何ですか？」

質問する様に、手を挙げる一誠・・・。

「墮天使と言うのは・・・神に仕えた天使が邪な感情を抱いたために墮天した存在・・・私達悪魔の『敵』よ。」

「・・・・・・・・。」

ダンは、握っていた拳を強く握る。

「(・・・・・・・・先輩?)」

小猫は、ダンの様子を心配そうに見た。

「それから・・・私達悪魔は墮天使と、太古の昔から争っているわ・・・。冥界・・・。そうね、人間界で言うところの『地獄』の覇権を巡ってね。地獄は、悪魔と墮天使の領土で二分化しているの・・・。悪魔は人間と契約して対価を貰い・・・力を蓄えるの。一方、墮天使の方は・・・人間を操りながら滅ぼそうとする。ここに神の命を受けて、悪魔と墮天使を問答無用で倒しに来る天使も含めて、三すくみ・・・それを、大昔から繰り返しているの。」

「……………」

「……………」(ポカーン)

ダンには、リアスの話を理解しながら聞いているが……一誠は、啞然とした表情をす
る。

「せ、先輩……幾ら何でも、それは一般生徒の男子高校生にとつて高難易度な話ですよ
？オカルト研究部つて、こう言う事を聞いたりするんですか？」

啞然としていた一誠は、口を開いて質問してきた。

すると、リアスは、ゆつくりと口を開いて……

「天野夕麻」

その言葉を聞いた、一誠が表情を強張る。

「イツセー……あの日、貴方は天野夕麻とデートしていたわよね？」

「……冗談なら、ここで終わらせて下さい。正直、その話はこういう雰囲気の話した
くないです。」

一誠は、立ち上がり怒りながらリアスにそう言った。

「落ち着け、イツセー……グレモリーも、遠回しの言い方はやめてくれ。イツセー
にとつて、良い思い出じゃないんだ。それに……幾らアンタが、イツセーを助けてく
れた恩人でも……幾らアンタが、塔城の部長でも……俺は容赦は、しないぞ……」

「？」

「ダンは、リアスを睨みつける。」

『っ!?!』

「ダンの睨みつけに……震える者、警戒する者、冷や汗をかく者と分かれていた。」

「(彼から発するこの気迫……ホントに、人間なのかしら?)……そ、そうね。配慮が足りなかったわ……ごめんなさい。」

リアスは、心の中で考えるも……謝罪をする。

「でも、これだけは言わせて?彼女は、間違いなく……存在していたわ。」

リアスが指を1回鳴らすと、朱乃の懐から写真を一枚取り出した。そこに写っていたのは、間違いなくあの……天野夕麻だった。しかも、彼女の背中には……一誠を襲った墮天使と同じ黒い翼があった。

「天野夕麻……いいえ、あれは墮天使。ある目的の為に、貴方に近づき、その目的を果たしたから……貴方の周囲から記憶と記録を消したの。」

「目的?」

「イツセー、貴方を殺すためよ。」

リアスの言葉を聞き、一誠は動揺する……。そして、ダンはとゆうと……。俯いて、握っていた拳の力をさらに強くする。

「な、何で俺が！」

「……イツセーの中にある、神器（セイクリッド・ギア）だ。」

「へ？」

「ツッ!? 貴方……どうしてそれを!?!」

ダンと言葉に、惚ける一誠と驚くリアス……。

「あのデートの時……天野が、言っていたんだ。」

「じゃ、じゃあ……ダンは、あの公園に来ていたのか!?!」

「いや……俺が来る頃には、天野が、イツセーにトドメをさすところだった。」

「……少し、良いかしら？」

「……何だ。」

「貴方、天野夕麻が墮天使だったって事……分かっていたんじゃないかしら?」

「!!?!?!」

リアスの言葉にダン以外のメンバーが驚くのだった。

「……ああ、そうだ。」

ダンは、リアスの言葉に肯定する。

「……どこで、知ったの？」

「……イツセーが、天野を俺に紹介した時にだ。」

「そう……」

「だ、ダン……。お前、夕麻ちゃんが……。墮天使だつて知ってたのか？」

一誠は、戸惑いながらもダンに聞いた。

「すまない、イツセー……。天野が、墮天使だつて分かっていたのに……。助けられなくて、ごめん……。」

ダンは、一誠に頭を下げる。すると一誠は、ダンの肩に手をおいた。

「頭を上げろよ、ダン……。俺は気にしてないし、それよりも……。俺はこうして、生きてるから気にするなよ……。な？」

「……。」

ダンは一誠の言葉を聞いて、啞然とする。

「それに、お前が、俺を助けてくれたんだろ？ありがとな、ダン！」

一誠は、ダンにお礼を言う。

「っ!?!……。敵わないな、イツセーには……。」

ダンはそれを聞いて、微笑む。

「そ、そうか……。俺なんて、ダンに比べたらまだまだだぞ？」

一誠は、頬をかきながらそう言った。

「そうでもないぞ……。イツセーには、良いところがある事を……。俺は知っている。」

真剣な顔で、ダンはいッサーにそう言った。

「な、なんか……そうゆう風に言われると、照れるなあ……。」

ダンの言葉を聞いて、頭を掻きながら照れる一誠。

「さて……話を戻すわね？」

「あ、はい……。」

「頼む……。」

「それじゃあ、二人が神器（セイクリッド・ギア）を持っている事が分かったところで……先ずはいッサー、手を上にかざしてちょうだい。」

一誠は戸惑いながらも……リアスの言われた通りに、左腕を上にした。

「目を閉じて……貴方の中で、一番強いと感じるものを心の中で想像して頂戴しようだ
い。」

「い、一番強い存在……。ド、ドラグ・ソボールの空孫悟かな……？」

一誠は、自分の好きな漫画のキャラクターを思い浮かべる……。

「その人物が、一番強い姿を思い浮かべて……半端な気持ちじゃ駄目よ？本気でやるの
よ。」

リアスの言葉を聞いて、戸惑うも……一誠は覚悟を決めて、大きな声で……

「ドラゴン波!!？」

そう言った……すると、一誠の左腕が赤く光り出す。

暫くして、光が止むと……そこには、赤色の籠手が装着されていた。

「なんじやこりやああああ!!?」

「(あれは……!）」

一誠は、驚き叫ぶと……ダンは、一誠の左腕を見て、目を見開いた。

「イツセー、それが貴方の神器(セイクリッド・ギア)よ。」

「これが……俺の……神器(セイクリッド・ギア)……。」

一誠はそう呟いて、自分の左腕を見る。

「その神器を危険視され、貴方は、彼女……墮天使の天野夕麻に殺されたの。」

「ちよ、ちよつと待つてくださいい!?!じゃあ、何で……。」

「イツセーが生きてるか……か?」

「ああ……。」

ダンの言葉に頷いた一誠……。

「確かに、俺が駆けつけた頃には……イツセーは死んでいた……。その後、グレモリーが来て……イツセーを悪魔に転生させたんだ……。そうだろ、グレモリー?」

ダンは、一誠に説明すると同時に……リアスの方に向けて、そう言った。

「ええ、そうよ。」

「……。」

眞実を知ったイツセーは、顔を暗くする。

「……大丈夫だ、イツセー。」

するとダンが、一誠の肩に手をおく。

「……ダン？」

「イツセーが悪魔だとしても……俺の友達つて事には、変わらない……。それに、イツセーは俺の良く知っている……。『兵藤一誠』と言う、存在なんだから……。」

ダンは、微笑みながら一誠に言った。

「はあ、やつぱりダンには敵わないな……。けど、サンキューな……。」

一誠は、ダンに礼を言う。

「さて……落ち着いたところで、改めて紹介するわ。貴方は私、リアス・グレモリーの眷属として生まれ変わったの。私の下僕の悪魔としてね……。」

ダン以外全員、背中からコウモリみたいな翼が生えた。

「それじゃあ、僕から自己紹介するね？僕は木場祐斗……二人と同じ二年つて事は分かっているよね？えーと、僕も悪魔です。よろしくね？」

そう言つて、祐斗は二人に向けてスマイルする。

「……一年の、塔城小猫です。よろしくお願ひします。後、悪魔です……。」
小猫も無表情のまま、自己紹介をする。

「うふふ、私は三年の姫島朱乃ですわ。一応、此処の副部长をやっていますわ。今後よろしくお願ひします。それから、これでも悪魔ですわ。」

続いて、朱乃も二人にニコニコしながら自己紹介をする。

「そして……私が、彼等の主であり……悪魔であるグレモリー家のリアス、グレモリーよ。家の爵位は公爵……よろしくね、イツセー。」

最後にリアスが、自己紹介をする。

「さて、次はダン……貴方の事について、聞かせてくれないかしら？」

リアスは、ダンにそう言ったのだった。

「……何が聞きたい。」

「貴方の神器とあの姿についてよ。」

「……分かった。」

ダンはその言つて、首にかけているネックレスをテーブルに置いた。

「……これが、俺の神器だ。シエリア、聞いてたか？」

《はい、話は全て聞かせてもらいました。》

ダンの問いに、答えるシエリア。

「っ！驚いたわ．．．意思を持つネットワークレス何て、初めて見るわね。」

《初めまして、リアス・グレモリーとその眷属の皆様．．．私は、マスターの神器（セイクリッド・ギア）のエンシエリット・ギア「古龍の神帝」と言います。》

「？．．．初めて、聞く名前ね。」

《それはそうです。私は：適合者がいない限り、姿を現さない特殊な神器なので．．．。》

「．．．変わった神器なのね。つまり、ダンが適合者だから存在してるわけね。」

《はい、そうです。》

「そして．．．あの姿が、神器の力なのね？」

《その通りです。》

「．．．ねえ、ダン。もし良かったら、私の眷属にならない？」

リアスは、ダンに提案を持ちかけた。

「すまない．．．それは、出来ない。」

しかし、ダンはそれを断る。

「．．．．．そう。」

「ただ．．．」

「？」

「オカルト部に．．．入ってもいいか？」

「っ！ええ、それぐらい構わないわ！」

「すまない……。」

「ふふ、別に謝る事はないわ。だけど、もし……悪魔になりたいのなら、言つて頂戴。貴方なら大歓迎よ。」

「……分かった。」

こうして……ダンは、オカルト研究部に入ったのだつた……。

———END———

〔第7話〕 「無限の龍神と金髪聖女」

〔第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス〕

〔第7話〕

「無限の龍神と金髪聖女」

ダンが、イツセーと共にオカルト研究部に入った次の日……イツセーは、部活（悪魔）の仕事であるチラシ配りをやっていた。一方その頃ダンはと言うと……

「……」

「……」

ゴスロリの少女に……制服の袖を掴まれて、立ち止まっていた。

「……えつと、君は？」

とりあえず、ダンは少女に質問した。

「……我、オフィス。」

少女は、そう答えた。

「そ、そうか……俺は、馬神弾だ。よろしくな、オフィス？」

「ん、よろしく……」

「ところで、俺になんかようか？」

「弾、強い……だから、お願いがある。」

「お願い？」

「グレートレッドを倒すの、手伝って欲しい。」

「(グレートレッド……確かそれって……)」

ダンが思い出そうとすると……

《最強のドラゴンの一体です。》

シエリアがそう答える。

「っ!? その声……姉様?」

オーフィスは驚き、声のした方に向いた。それと同時に、ダンもネックレスを取り出してオーフィスに見せた。

《ふふふ、お久しぶりですね……オーフィス?》

「ん、久しい……」

オーフィスは、少しだけ微笑んだ。

「知り合いか、シエリア?」

《はい、と言うよりも……私が、指名したんです。》

「そ、そうか……。ところで、オーフィスは何で俺に手伝って欲しいんだ？」

シエリアの話の聞いて、苦笑するも……。すぐに真剣な顔になって、ダンはオーフィスに聞いた。

「我、静寂ほしい……」

「静寂？」

「次元の狭間、グレートレッドいる、グレートレッド、我より強い、だけど、弾、強い。我とグレートレッド以上……。だから手伝って欲しい。」

「……」

「我、彼処しか、居場所ない……」

オーフィスは、寂しそうな表情で言った。

《そう言えば、そうでしたね》

「そうか……。なあ、オーフィス。」

「ん？」

「俺の家に来ないか？」

「弾の家？」

「ああ。」

「何故？」

「なんて言うか・・・放つてはおけないって、思ってたな。それに・・・オフィスには、もつとこの世界を見て、興味を持って欲しいんだ。」

「この世界？」

「ああ。」

ダンの言葉を聞いて、オフィスは暫く考えた。

そして・・・

「分かった。我、弾の家に、行く。」

「そっか・・・。」

オフィスの言葉を聞いて、微笑むダン。

《ところで、オフィス？貴女・・・マスター以外に、協力を頼んだ者がいるのですか？》

シエリアはオフィスに、そう尋ねる。

「いる」

「・・・オフィス説明中・・・」

「（完全に、利用されてるな・・・。）」

《オフィス・・・すぐに、【渦の団】を抜けて下さい。良いですね？》

「何故？」

「もう・・・そこに居る必要がないからだ。」

ダンはおーフィスが、利用されている事を伏せて、そう言った。

「わかった・・・我、渦の団、抜ける。」

そう言つておーフィスは、魔法陣を発動させて、その場から消えたのだった。

――翌日――

「はあ・・・また、黒歌か。」

ダンはため息をして、布団を捲るとそこには・・・

「・・・」

「お、おーフィス!？」

おーフィスが気持ちよさそうに、ダンに抱きついて寝ていた。

数分後・・・

「……話は、大体分かった。」

オーフィスが、起きた後……ダンは、オーフィスから訳を聞いたのだった。

「それじゃあ、改めて……これからよろしくな、オーフィス？」

「ん、よろしく、ダン……」

こうして、ダンの家にまた一人……家族が、増えるのであった……。ちなみに、オーフィスの事を黒歌に話すと、驚愕していた……。

オーフィスが、ダンの家に住んで、3日経って……黒歌の猛烈なアピールも更に、増していく。しかし、ダンには相変わらずの鈍感さで、気にしずじまい。

そして、今日……オカルト研究部の部活に出たダンに、一誠が「一緒に手伝って欲しい」と頼まれるのであった。リアスもそれに承諾するも……小猫だけが、不機嫌に一誠の事を睨んでいたのであった。

そして現在、一誠とダンはと言うと……

「つて、事があつたんだ……」

げっそりした感じで、一誠は悪魔の仕事の事をダンに話していた。

「どう思う、ダン!？」

当然、涙を流して……ダンの両肩に、手をおいて叫ぶ一誠……
「た、大変だったんだな……」

ダンとは、若干引き気味で、そう答える。

「そうか！ダンも俺の気持ちも分かってくれるか!？」

一誠は嬉しそうにそう言った。

「(とりあえず、元気になったみたいだな……)」(苦笑)

ダンはそのような一誠の様子を見て苦笑いする。

「はうっ!」

すると、二人の前で誰かが転んだ。

「あうう……何で、転んでしまうんでしょうか?」

そこには、シスター服を着た金髪の少女が涙目で、そう呟いたのだった。

「(か、可愛い!!?)」

一誠は、少女を見てそう思った。

「……大丈夫か?」

ダンには心配して、金髪の少女に声をかける。

「あ、大丈夫です!」

少女は、ダンの言葉に反応してすぐに立ち上がって、笑顔でそう答える。

「旅行か、何かなのか？」

ダン、少女の後ろにある荷物を見てそう問いかける。

「いえ、実は……」

少女説明中……

「と言う訳です。」

「へえ……大変だったんだな……」

「……」

少女の話を聞いた二人だが、ダンだけは……

「話をしていた際に、時々見せたあの表情……彼女には、暗い過去があるみたいだな……」

少女に何かあると、感じ取ったダン。すると……

「うわあああああん！」

公園で男の子が大きい声で、泣いていた。するとシスターが、男の子に歩み寄る。

「男の子ならこのくらい泣いたケガで、泣いてはダメですよ？」

少女は、両手をケガを負った膝へ当てると……少女の手から淡い緑色が発せられ、子供の膝を照らし出す。

「あれは、神器か？」

ダン は少女の力を見て、そう思ったのだった。

そして、男の子が怪我した膝は、治るのであった。

「はい、傷は無くなりましたよ。もう大丈夫です。」

少女はそう言つて、男の子の頭を撫でて、ダンと一誠の方に向いて……

「すみません、つい……」

舌を出し、小さく笑う。

暫くして、男の子の母親が来て男の子の手を取り、その場から立ち去つた。

「ありがとう！お姉ちゃん！」

子供が振り返つて、手を振りながら感謝の言葉を伝える。

「？」

しかし、少女は言っている事が分からない為、首を傾げる。

「ありがとう、お姉ちゃんだつてさ。」

一誠が代わりに通訳すると、少女は微笑むのだった。

「君、その力……」

ダン は少女に聞くと……

「はい、治癒の力です。神様からいただいた素敵なモノなんです……」

「(また、あの表情だ……)」

そう言つて、微笑む少女……しかし、その表情はどこか寂しげだった。ダンも、少女の表情を見てそう思つたのだった。

そして3人は、無言のまま教会がある方へと向かつて行くのだった。

「着いたぜ！」

一誠の案内により、無事に目的地の教会に着く。

「ありがとうございます！」

少女は、笑顔でお礼を言う。

「っ!!?」

すると、ダンと一誠は教会から嫌な気配を感じ取るのだった。

「じゃ、じゃあ……俺達は、ここで……」

「あつ、待つて下さい！」

その場から立ち去ろうとする一誠とダンに少女が、呼び止める。

「あの、せめてお礼だけでも……」

「……気にするな。それに、困つた時はお互い様だろ？」

「そうだけ。」

「ふふふ、二人は優しいですね。あつ！私、アーシア・アルジエントと言います！アーシ

「アと呼んでください。」

「俺は兵藤一誠。俺の事はイツセーって呼んでくれ。」

「馬神弾だ。それから、俺の事はダンでいい．．．よろしくな、アーシア？」

「はい！イツセーさん、ダンさん。本当に、ありがとうございます！必ず、またどこかでお会いしましょう！」

アーシアそう言つて、荷物を持って教会に向かったのだった。

「行くぞ、イツセー。」

「おう．．．それにしても、あの嫌な感じはなんだろうな？」

一誠は、感じた事をダンに聞いてみた。

「さあな。それより．．．早く部室に戻るぞイツセー、悪魔になったイツセーだと正直、キツイだろ？」

「うっ！す、すまねえ．．．。」

ダンと一誠は、すぐさまその場を離れる様に移動する。

「(それにしても、あの教会．．．墮天使の気配が複数ある．．．何かあるな．．．)」
「ダンはどうした、教会の方へと視線を移す。」

「ん？どうした、ダン。」

「いや．．．何でもない。」

一誠とダンは、再び歩き出したのだった。

「二度と教会に近づいちゃダメよ！」

部室に帰って来た、ダンと一誠はリアスに今日の事を話すとすぐに説教が行われた。

「教会は私たち悪魔にとって敵地なの。踏み込めばそれだけで、神側と悪魔側の間で問題となるわ。今回はあちらもシスターを送ってあげた貴方の厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけど・・・下手をすると、光の槍が飛んでくるかもしれないのよ？」

「・・・ハイ、スママセン。」

「それから、教会の関係者にも関わってはダメよ。特に、悪魔祓い（エクソシスト）は私達悪魔の天敵・・・神の祝福を受けた彼らの力は私達を滅ぼせるほどよ。神器（セイクリッド・ギア）所有者が悪魔祓い（エクソシスト）なら尚更よ。」

それは、死と隣り合わせるのと同義だわ。」

「・・・ハイ。」

「悪魔祓いを受けた悪魔は完全に消滅するわ。つまり、無に帰すの。何もなく、何も感じ

ず、何も出来ない。どれだけの事か、貴方に分かる？」

「ハイ……」

「……ふう、ごめんなさい。熱くなりすぎたわね……。とにかく、今後は気をつけてちょうだい。」

「……ハイ、スミマセンでした。」

「それから、貴方もよダン。人間としての死は、悪魔の転生で免れるかもしれないわ。けれど、もう少し考えてちょうだい。貴方の存在は堕天使に知られてしまっているのだから。」

「……すまない。」

リアスの言葉を聞き、謝罪するダン。

「あらあら。お説教は、すみましたか？」

「おわッ!？」

いつの間にか、一誠の背後に朱乃がニコニコしながら立っていた。

「朱乃、どうかしたの？」

リアスの問いに朱乃は、少し曇らせた。

「大公から討伐の依頼が、届きました。」

第8話「はぐれ悪魔の討伐！赤きブレイヴ、砲竜バル・ガンナー!!？」

【第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス】

～第8話～

「はぐれ悪魔の討伐！赤きブレイヴ、砲竜バル・ガンナー!!？」

ーソーダnsiderー

深夜、先ほど姫島から話を聞いた俺を含むオカルトメンバーは、町外れにある廃工場の近くに来ていた。

「なあ、はぐれ悪魔ってのは何だ？」

イツセーは、はぐれ悪魔とは何なのか木場に質問した。

「はぐれ悪魔は、元々悪魔の下僕だった者の事を言うんだ。」

「俺達みたいなもんか？」

「たまに主を裏切り、又は殺して好き勝手に生きようとする連中がいるんだよ。それが、はぐれ悪魔さ。」

「そのはぐれ悪魔さんが、この先の廃工場で人間を誘き寄せた人間を食べていると報告

がありまして……。」

姫島が、そう言う……。

「た……食べッ!？」

それを聞いたイツセーは、表情を引き攣らせていた。

「つまり……それを討伐するのが、俺達の仕事と言う訳か。」

「そういう事よ。後、イツセーは今日が初めてだから見学だけでいいわ。ダンもね。」

「わ、分かりました……。」

「……分かった。」

「それから、イツセーには駒の特性を理解してもらおうわ。」

「駒の特性?」

イツセーは、首を傾げてグレモリーに聞く。

「まず、イツセーはチェスをした事があるかしら?」

「やった事はありませんけど、ルールぐらいなら……。」

「それでいいわ。それじゃあ、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）の説明をするわね。」

「イーヴィル・ピース?」

「貴方を悪魔に転生させたアイテムよ。」

そう言って、グレモリーは赤色で馬の形をした物を取り出した。

「まず、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）は、チェスの駒をモチーフに作られているわ。つまり、『王（キング）』、『女王（クイーン）』、『騎士（ナイト）』、『戦車（ルーク）』、『僧侶（ビショップ）』、『兵士（ポーン）』の五つにはそれぞれの特性が備わっているの。」

「なんか、すげえな……。」

「なるほど……つまり、『王（キング）』がグレモリー、『女王（クイーン）』が姫島、『騎士（ナイト）』が木場、『戦車（ルーク）』が塔城つて、言ったところか？」

「!!?!」

俺が、誰がどの駒か言い当てると、イツセー以外のメンバーが目を見開いて驚いていた。

「す、凄いわね……一発で言い当ててるなんて……」

「あらあら、洞察力が良いんですね。」

「す、すごいね、馬神くんは……。」

「先輩、凄すぎます……。」

「そうか？これぐらい普通だと思うが……。」

「幾ら何でも規格外過ぎるわよ……。」

グレモリーが、頭を抱えてそう言った。

ん？何かおかしいなと言ったか、俺？

俺が、そう思っていると・・・

「ッ!?!」

廃工場の中から殺気がある事に感じ取った俺は、立ち止まった。

「ん?どうした、ダン?」

イツセーが、立ち止まった俺に声を掛けると・・・

「血の臭い・・・」

塔城がそう言つて、服の袖で鼻を抑えた。

「・・・来るぞ。」

俺の一言に、イツセー以外が構えた。

「・・・カサカサカサ・・・」

「不味そうな匂いだ・・・でも、美味しそうな匂いもするわ・・・甘いかしら?それとも、

苦いのかしら?」

不気味な声が辺りから響き渡るのだった。

「はぐれ悪魔バイサー、貴女を討伐に来たわ。」

グレモリーが構えながら言うと、何かが飛んで来て近くに落ちる。

「ッ!」

それを見た瞬間、俺とイツセーは目を見開いて確認した。その正体は・・・男性の死

体だった。上半身だけで、死体になった男性の顔は、絶望に染まった顔……それを見た瞬間、怒りが込み上げてきた。

そして、暗闇からゆっくりと姿が現れた。

「おっばい!」

……上半身裸の女性が宙に現れた瞬間、イツセーは歓喜の声を上げた。イツセー……俺は、イツセーの態度に頭を抱える。

「主の元を逃げ、その欲求を満たす為だけに暴れ周る不貞の輩……。その罪……。万死に値するわ! グレモリー公爵の名において、貴女を消し飛ばすわ!!?」

「フン、小賢しい小娘が……。その紅い髪のように、貴女の身を鮮血で染めてあげるわ!」
「雑魚ほど洒落たセリフを吐くものね。」

「これがはぐれ悪魔……。ただの見たがりのお姉さんにしか見えない。」

「ハア……。イツセー、彼奴の姿をよく見ろ。」

「え?……。うおっ!?!」

俺の指摘にイツセーが、バイサーの姿を見て驚いた。

バイサーの姿は、上半身が人の体で、下半身が巨大な腕に獣の様な足と尻尾には、蛇が独立で動いていた。

「あんな良いおっばいなのに……」

「イツセー……」

俺は、イツセーのセクハラ発言に呆れる。

「コレでも、喰らいナ!」

「ツ!危ない、イツセー!!?」

「うわあっ!?!」

俺は嫌な予感を感じ、イツセーの腕を掴んで引くと……バイサーの攻撃で、先ほどイツセーが立っていた所が溶けていた。

「あ、危ねえ……」

「大丈夫か、イツセー?」

「わ、悪りい……」

「油断しちゃダメよ、祐斗!」

「はい!」

グレモリーの指示に木場が、バイサーに向かって行く。

「消えた!?!」

イツセーは、木場がいなくなった事に驚いていた。

「いや、目に追えない速さで動いているだけだ。」

「ダン言う通りよ。祐斗の持つ騎士(ナイト)の特性は“スピード”そして、最大の武

器は劍。」

バイサーが周囲を見渡す中……懐に入り込んだ木場が、手に持っている劍でバイサーの腕を斬り落とした。

「ギャアアアアッ！」

傷口から血が噴き出し、バイサーは腕を斬られた痛みで悲鳴が木霊した。すると……塔城が、バイサーに近づいた。

「コロシテヤルウウウッ！」

バイサーはそう言つて、塔城に襲い掛かる。

「危ない、小猫ちゃん！」

イツセーは、塔城に呼び掛けた。

「大丈夫だ、イツセー。」

「ダンの言う通りよ、イツセー。小猫の持つ戦車（ルーク）の特性はシンプルで、バカげた力と防御力。だから……」

「……吹っ飛べ」

塔城はバイサーを殴った瞬間、バイサーは文字通り吹っ飛んで行き、壁にぶち当たった。

「す、スゲエ……」

塔城の攻撃を見て、イツセーはそう眩いた。

「朱乃」

「はい部長。あらあら、どうしようかしら?うふふ」

笑いながら、倒れているバイサーに近づいて行く姫島。

「なんか、怖いな・・・」

「それじゃあ、行ってみましようか♪」

姫島が手を挙げた瞬間・・・バイサーの頭上に魔法陣が現れると、落雷がバイサーに襲い掛かった。

「ギヤアアアアアアアアツ!!?」

バイサーは悲鳴を上げる。

「あらあら、良い悲鳴ですわ♪」

姫島は、楽しそうに笑んだ。

怖っ!

「彼女は女王(クイーン)・・・その特性は、他の駒全ての力を兼ね備えている無敵の副部长よ。」

「どんどんいきますわよ♪」

「ゴロゴロゴロドオオオオオオン!!?ゴロゴロ」

「ギャアアアアアッ！」

「付け加えて、彼女は究極のSよ。」

「それ♪それ♪」

「ガアアアアアアアッ!!?」

「あ、あの・・・部長？俺、朱乃先輩が怖く見えるんですけど・・・。」

イツセーはガタガタ震えながら、グレモリーにそう言った。

「大丈夫よ、イツセー。朱乃は、仲間には優しいから」

「そ、そうですか・・・。」

「ええ、そうよ。・・・さて、朱乃もういいわ。」

「あらあら、残念ですわ。」

姫島は、残念そうにバイサーから離れる。入れ替わるようにグレモリーがバイサーの

近くに来る。

「最後に言い残す事は？」

「殺せ・・・。」

グレモリーの問いにそう返す、バイサー

「そう・・・なら、消えなさい！」

グレモリーはそう言って、手から魔力を放ち、バイサーは跡形もなく消し飛ばした。

「終わったわ。さあ、帰るわよ。」

「はい、部長。」

グレモリーの言葉で、何時もの陽気な雰囲気に戻る。

「あの、部長・・・俺の駒の特性って、何ですか?」

すると、イツセーはグレモリーに質問する。

「兵士（ポーン）よ。」

「・・・へ?」

グレモリーの言葉を聞いて、惚けるイツセー・・・。

やっぱり、イツセーの駒は兵士（ポーン）だったか・・・

「兵士（ポーン）って、まさか・・・」

「そう、イツセー。貴方は、兵士なの。」

笑顔でイツセーに伝える。

「・・・って、一番下っ端のアレーーーー!?」

イツセーの絶叫が響きわたった。

ーーーーダン side outーーー

「それじゃあ、帰りまsh「いい加減、出て来たらどうだ?」ダン?」

リアスの言葉に覆い被さる様にダンが前に出てそう言うと、リアスが不思議そうにダ

ンを見た。

「あれまあ、気付かれちゃったか……。」

すると、奥から大鎌を持った男が現れたのだった。

『ツ!!??』

「誠とダン以外が、男を見た瞬間警戒態勢へと入った。

「ツ！貴方はSS級はぐれ悪魔フルー！」

リアスは、はぐれ悪魔を見てそう叫んだ。

「これはこれもどうも初めまして、グレモリーさんと眷属の皆さん？ワタクシ、大鎌のフルーと言います。」

「どうして、SS級はぐれ悪魔が……。」

「なあと、簡単な事ですよ。下級はぐれ悪魔を餌に、貴女方の様な討伐者が来るのを待っていたんですよ。」

「どういう事なの？」

「いや……この頃退屈してね、人間を沢山殺しても飽きる一方……なら、この退屈な時をどうするか……それで閃いたのですよ。」

フルーは、語りながら大鎌で遊ぶとその手を止めてリアス達の方に向いて笑いながら言葉が続けた。

「俺様をはぐれにした悪魔達を殺せばいいって……ねっ!」

するとフルルは、物凄い速さで大鎌をリアスに振り下ろす。

「ッ!?!」

「「部長!?!」」

「危ない!!」

大鎌はそのままリアスを……

「……ガシッ……」

斬られる事は無かった。

「ッ!何!?!」

フルルは驚き大鎌を防いだところを擬視する。

「……大丈夫か、グレモリー?」

フルルの攻撃を防いだのは……馬神弾だった。

そして、ダンにはリアスの方に向けて安否を確認した。

「え、ええ……大丈夫よ。」

リアスは、惚けるもすっかりとダンに答えた。

「テメエ……何もんだ?俺様の攻撃を防ぐところ……オメエ、ただの人間ではないな?」

「……」

「黙りかよ。まあいい、テメエを殺してそこにいる奴等を……バラバラに斬り殺してやるよ!」

そう言つて、ダンから距離を取つた。

「……グレモリー、コイツは俺が相手をする。」

『ツ!?!』

ダンの言葉を聞いて、リアス達は驚く。

「正気!?!相手は、はぐれ悪魔でもかなりの実力者なのよ!?!」

リアスは大声でそう叫んだ。

「大丈夫だ。それに……」

「?それに?」

「俺の力……見てみたいだろう?」

ダンは、不敵に笑つた。

「……はあ、分かつたわ。」

「部長!?!」

リアスが承諾した事に、驚く木場……。

「すまない、それと……イツセイ達を連れて少し離れている。」

「分かったわ。」

ダンの言葉に頷き、リアスはイツセー達と共にダンと男から離れた。

「部長、馬神君だけで本当に大丈夫なのでしょうか？」

木場が、心配そうにダンを見る。

「そうね。でも、彼は墮天使を圧倒したのは事実・・・とりあえず、ダンを信じるしかないわ。」

「大丈夫ですよ、部長。」

「イツセー？」

「確証はありませんけど・・・。」

そう言って、イツセーはダンを見る。リアス達もつられてダンを見る。

「人間が悪魔に楯突くとどうなるか思い知るがいい！」

そう言って、フルルは大鎌を構えた。

「いくぞ、シエリア！」

《はい、マスター!》

ダンの呼び掛けにシエリアが応えると、ダンにバトルフォームが装着された。

「あれが、彼が持つ神器の姿・・・。」

リアスは、ダンの姿を見てそう呟いた。

「へえ〜〜神器持ちか、おもしろエ。」

フルはダンを見て、好戦的な笑みをした。

「いくぞ・・・」

ダンはそう言つて、デッキケースからカードを1枚取り出した。

「……BGM：太陽龍飛翔……」

「太陽よ、炎を纏いて龍となれ！太陽龍ジーク・アポロドラゴン!!？」

「……ガアアアアアツ!!?……」

ジークアポロが炎と共に現れて、ダンを包み込んだ。

「ダン!」

「馬神君!」

「先輩!」

目の前の光景にリアスと祐斗と朱乃と小猫がダンの名前を呼ぶ。

「……ガアアアアアツ!!?……」

ジーク・アポロが吠えけると同時に炎が消えてなくなり、そこにはジーク・アポロをモチーフの全身鎧で身に纏ったダンの姿がそこにあつた。

「あれは、あの時の!」

リアスは、思い出したかのように言う。

「凄い力を感じますわ。」

「龍の鎧……。」

「これが、馬神君の力……。」

ダンの姿を見て、そう呟く朱乃と小猫と祐斗。

「な、何だその姿は!?!」

【いくぞ……】

そう言つて、ダンは消えた。

「消えた!?!」

リアスは、ダンが急に消えた事に驚く。

「なっ!?!何処に【遅い。】グハツ!!?!」

フルルはダンが消えた事に戸惑い、ダンの攻撃を受けて地面に叩きつけられた。

「そんな、僕の目でも追えないなんて……。」

祐斗は、ダンのスピードを見えなかった事に驚くのだった。

「グツ!?!人間があつ……調子に乗るなああああつ!!?!」

フルルは、怒り狂う様に大鎌をダンに振り下ろした。

「死ねエエエツ!」

【甘い!フラッシュタイミング!マジック、サジツタフレイムを使用!!?!】

ダンが、そう叫ぶと……無数の火矢が上空から降り注ぎ、フルに襲い掛かった。「何?!がああああああつ!!?」

火矢が何本か当たり、フルは苦しむ。

「す、スゲエ……」

「あのはぐれ悪魔を圧倒するなんて……」

「あの力は、上級悪魔と同等ですわね……」

「先輩、強い……」

「(堕天使を圧倒して、今戦っているはぐれ悪魔でさえも圧倒するなんて……ダン、貴方は一体何者なの?)」

ダンの戦いを見て、オカルトメンバーはそれぞれ感想を言った。

「グッ!クソがアツ……」

「これで、終わりだ。」

ダンはそう言つて、一枚のカードを出した。

「……BGM:ブレイヴ!……」

【砲竜バル・ガンナーを召喚!】

ダンがそう言うと、赤のシンボルが現れた。そして、そのシンボルから額に赤い小さなシンボルを埋め込んだドラゴンが現れる。翼を持たず、背中に二台の砲門を背負った

スピリットが出現する。

「何だアレ!?!」

「ドラゴン!?!」

一誠とリアスがバル・ガンナーを見て驚く。

【砲竜バル・ガンナー、ブレイヴだ。】

ダンがそう言うのと、砲竜バル・ガンナーの背中中の砲台が分離し、本体は消滅する。同時にダンの背中にある翼が消え、その背中に砲竜バル・ガンナーの砲台が合体し、金色のアーマーの赤いラインもさらに強く、燃える様に赤く輝いた。

【終わりだ、フール!】

そう言って、ダンの背中にある砲台からエネルギーが集まる。

「こ、ここのなればっ!」

フールはそう言って、逃げる様にその場から離れようとする。

「彼奴、逃げる気だ!ダン!!?」

一誠はフールが逃げる事が分かり、ダンの名前を叫んだ。

【逃がしはしない!止めだ、ブレイヴアタック!!?】

ダンの言葉が、合図となり・・・砲台に溜まっていたエネルギーが発射した。

「なっ!?!ギャアアアアアアアアアアアッ!!」

「ーードゴオオオオオオン!!ーー

砲撃がフルルに当たり、爆発した。そして、フルルの姿がない事を確認したダンは武装を解いてリアス達の方に向かった。

「討伐出来たぞ、グレモリー。」

ダンは、リアスに報告をする。

「・・・ご苦労様、ダン。」

「?どうかしたのか、グレモリー?」

リアスの様子に変化があるのに気付き、問い掛けるダン。

「貴方は一体・・・。」

「・・・とりあえず、ここから離れよう・・・話は、部室でしよう。」

「・・・分かったわ、それじゃあ帰りましょう。」

「「はい!!!」」

オカルトメンバー達は、廃工場を後にしたのだった。

ーー第8話 ENDーー

〈第9話 「ダンの正体と語られる力……」〉

【第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス】

〈第9話〉

「ダンの正体と語られる力……」

はぐれ悪魔を討伐し終えたダンとオカルトメンバーは、部室に戻ってソファアールに全員が座ると、リアスが口を開いた。

「それじゃあ、話してもらおうわよダン。」

リアスがそう言うと、皆はダンの方を一斉に向いた。

「……分かった。だが、その前に……皆に言わないといけない事がある。」

「何だよ、急に改まって……」

「まず、俺は……この世界の人間じゃないんだ。」

ダンの言葉を聞いて、リアス達は固まる。

「ど、どういう事？」

最初に正気を取り戻したリアスは、ダンに聞く。

「俺は神様によって、ここに転生させられたんだ。」

『か、神様!!????』

ダンの言葉に、驚愕するリアス達。

「ど、どういう事だよダン。」

「……すまない、これ以上は話せない。」

そう言つて、ダンは暗い表情をした。

『……………』

ダンの表情を見たリアス達は、これ以上の追求はしなかった。

「……分かったわ、これ以上追求しないわ。」

「すまない……。」

「でも、いつか話して頂戴……私達は種族は違うけど、同じ部活に所属する仲間なんだから……。」

「ありがとう。」

リアスの言葉を聞いて、微笑むダン。

「それじゃあ、次に……あの力の正体を教えてもらえるかしら?」

「それぐらいなら、構わない。」

そう言つて、ダンはデッキを机の上に置いた。

「これが、俺の力の正体だ。」

「カード？でも、確かに強い力は感じるわね・・・少し、見せてもらってもいいかしら？」

「ああ、構わない。」

ダンの了承を得て、リアスは机にあるデッキを見始めた。

そして、リアスと同じ様に他のメンバーもカードを見始めた。

「色々、あるわね・・・。」

「あらあら、宝石みたいなものあってオシャレだわ。」

「（あ、このカード可愛い・・・）」

「へえ・・・武器を持っているのもいるんだね。」

「なあ、ダン。女の子のカードもあるのか？むしろ、そつちを見てみたい！」

「・・・変態です。」

「グハッ！」

一誠の言葉を聞いた小猫はそう言って、パンチを決め、一誠を沈めた。

「（相変わらず、ブレないな・・・）まあ、あるにはあるかな・・・俺が持っているのは1枚だけだが・・・。」

「ウオオオオオッ！マジか!?!見せてくれ!!?！」

興奮して、ダンに詰め寄る一誠。

「お、落ち着け．．．今は、そのカードは持っていないんだ。」
「マジか!?はあ、見たかったなあ．．．そのカード。」

一誠は、残念そうに落ち込む。

「(そう言えば、あのカードを使った事がなかったな．．．使ってみたいけど、まずバトルが出来ないから無理か．．．)。」

「ところで、このカードは何なの?」

リアスは、カードが何なのかをダンに聞いた。

「そのカードは『バトルスピリッツ』と言うカードだ。」

「バトルスピリッツ．．．。」

「そのカードは、俺の世界で一番流行しているトレーディングカードゲームなんだ。」

「へえく〜く〜そうなのか．．．。」

「これのお陰で、色々な出来事があつて．．．俺にとっては、大切な思い出だな。」

ダンは、どこか楽しそうで、どこか切なさそうに語った。

『．．．．．』

ダンの話を聞いて、リアス達は黙ってダンを見た。

「(あの表情．．．彼には、一体どんな過去があつたのかしら．．．)。」

リアスは、ダンの表情を見て気になったのであつた。

「ふう・・・今日は、これくらいにして終わりましたよ。」

リアスの言葉に全員が頷き、今日は解散するのだった。

ダンが帰った後・・・リアス達はダンの事について話していた。

「彼の話からして、まだ何かあるわね・・・。」

「神様に転生させられただけでも、結構驚きましたわ・・・。」

「後、馬神君の話聞く限り・・・彼は、一般人の筈なのにはぐれ悪魔との戦闘や墮天使を圧倒したと言うのが可笑しいところです。」

「ですが、先輩の戦いははつきり言っただけで素人とは思えない太刀筋です。」

「そもそも、ダンがこの世界の人じゃないって事に実感が湧かないんだよね・・・。」

「その事は、いずれダンが話す事を待ちましょう・・・。」

そう言っただけで、リアス達も自分達の家へと帰って行ったのだった。

—————
E N D
—————

第10話「一誠の危機！青のブレイヴ、牙皇ケルベロード!!?」

【第一章 旧校舎の太陽龍とディアボロス】

第10話 「一誠の危機！青のブレイヴ、牙皇ケルベロード!!?」
放課後になった途端、ダンはおカルト研究部の部室に向かっ

「ところで、今日は何をやるんだろうな……。」

部室に着くと、ダンはその言う中に入っ

「……塔城？」

「……どうもです、先輩。」

其処には、ソファアに座ってお菓子を食べている小猫の姿があ

「早いな……1年は、授業が終わる時間が早いのか？」

「……今日は、偶々早く終わっただけです。」

「そうか……あつ、そうだ。」

ダンは思い出したかの様に、鞆からラッピングされた包みを取り出して、小猫に渡した。

「……これは?」

ダンから渡された包みを見て、小猫は首を傾げて聞いた。

「クツキーを焼いてみたんだが……食べてくれないか?塔城の感想を聞いてみたいんだ。」

「そうですか……ですが、食べ物に関してはうるさいですよ?」

そう言つて、少し意地悪ぽく笑う。

「お手柔らかに頼むよ……。」

ダンは、苦笑しながらそう言つた。

「ふむ……形の方は問題ありませんね……匂いも文句ありません……。」

小猫は、クツキーを一つ取つて真剣な顔でそう言つた。

「では、いただきます……。」

小猫はクツキーを一つ取つて、口に含んだ。

「ツ!」

すると小猫は、目を見開いて更に一つ取つて口に含んだ。

「ツ!!」

「どうだ塔城?」

ダンは、小猫が食べたまま固まっているのを見て思わず聞いた。

「……甘過ぎず、丁度良い美味しさ……。そして、今食べたクッキーは最初に食べたクッキーとは違った味付けになって……。混ざり合った味では無く、クッキーの一つ一つの味が楽しめる……。」

「つ、つまり……?」

「美味しいです……。凄く、私好みです。」

そう言つて、ダンに微笑んだ小猫。

「そうか……。それは良かった。」

ダンもそれを聞いて、微笑んだ。

「先輩も此処に座つて、一緒に食べませんか?」

小猫が、自分が座っているソファアの隣をポンポンと叩く。

「……。いいのか?」

「はい、構いません……。」

「それじゃあ、お言葉に甘えて……。」

そう言つて、ダンは小猫の隣へと座るのだった。

「……。それから先輩、お願いがあります。」

「ん?何だ……。」

「私の事は……。『小猫』と呼んで下さい……。」

「……………えっと、それはつまり名前と呼んでくれという事か?」

「……………」(コクッ)

ダンの問いに、無言で頷く小猫。

「(まあ、それくらいなら別にいいか……………)それじゃあ、改めて……………よろしくな、小猫。」

「はいっ、こちらこそよろしくお願いします……………ダン先輩。」

こうして、ダンと小猫の距離が縮まったのだった。他のメンバーが来るまでダンと小猫は、クツキーを食べながら色々な話をし始めた。

暫くして、一誠や祐斗……………最後にリアスと朱乃が入って来た。

「あら?どうやら私達で、最後みたいね。それじゃあ、皆揃っている事だし……………部活を始めましょう。」

「……………はい、部長!!!!」

リアスの言葉に返事をするダン以外のメンバー。

「よし!今日こそは、契約を取ってやるぞ!!」

一誠はそう意気込んだ。

「ふふふ、頑張つてねイツセー。」

イツセーのやる気に、微笑みながら応援するリアス。

「はい！部長！！」

そう言つて、イツセーは部室から出て行つた。

「……………」

「……………どうしたんですか？ダン先輩……………」

「……………いや、何でもないさ小猫。」

ダンが、一誠が出たドアを見つめていた時、首を傾げながらダンに問う小猫。しかし、
ダンは小猫にそう言うのとドアから視線をずらし、自分の鞆から端末機を取り出そうとす
ると……………」

「何だ？グレモリー……………それに、木場も姫島も……………」

ダンは、自分に視線を向けた人物達の名を言つた。

其処には、ダンと小猫を見てニヤニヤしているリアスと朱乃と祐斗だつた。

「ふふふ、何でもないわ。」

「うん、何でもないよ馬神くん。」

「あらあら、うふふ……………」

「……………そうか。」

ダンは、それ以上言わずに端末機を取つた瞬間……………」

「ッ!？」

ダンは、突然立ち立ち上がった。

「……ダン先輩?」

小猫は、心配そうにダンを見た。

「(何だ?この嫌な感覚は……まるで、誰かの危機の様な……まさかっ!?)」
「ど、どうしたのダン?」

リアスは、ダンが急に考えた途端、いきなり目を見開いて何かに気がついているのを見ても
わず声を掛けた。

「すまない!何か嫌な予感がする!!?イツセーの様子を見てくる!」

「あつ!ちよつ!!?」

リアスが、ダンを呼び止めようとする前に、ダンは急いで部屋から飛び出して行った
のだった。

く一誠 side く

よう、皆!ハーレム王を目指しているイツセーだ!!?

今、俺は悪魔の仕事である契約を取る為に、依頼人の家へ向かっていると聞いています!

「つと、此処だな？ちわース、グレモリー様の使いの悪魔ですけど、依頼者の方いらっしゃいますか〜〜。」

依頼者の家に着いた俺は、ドア越しで呼びかけた。

．．．．．

しかし帰つて来たのは、沈黙だった．．．留守なのか？そう言つてドアノブに手を掛けてそのまま回すと．．．

ーガチャツ！ー

「えっ？鍵が開いてる．．．．．どういう事だ？」

俺は不審に思いつつも、そのまま中へと入つて行つた。

「失礼しま〜〜す．．．．．」

中に入ると、電気が消えていて．．．ますます不気味に感じた。

「(何だろう．．．．．こうゆうシーンを映画やテレビで見た事あるような．．．．．)」

取り敢えず、怖く思わない様に巫山戯る事にした。

「．．．．．ん？下の階から灯りが点いているみたいだ。良かった〜〜ちやんと居るみたいだし、早く契約を取ろ〜〜。」

俺は、安心して灯りが点いている部屋に入つて行つた。

「失礼しま．．．．．うわあああ!？」

其処には、逆十字の格好で壁に貼り付けられた男性の死体だった。

「一誠 side out」

「ゴボツ……うええ……」

一誠はその死体を見て吐いてしまったのだった。

「何だよこれ……」

何とか、立ち上がる一誠は壁に血で書かれた文字を見てそう呟いた。

「『悪い事する人はおしおきよ』って、聖なるお方の言葉を借りたのさ!」

「!？」

一誠は、声が出た方向を見ると……其処には、ソファーに座って不気味な笑みを

浮かべている神父の服を着た青年が居た。

「お……これはこれは悪魔くんじゃないですか」

神父の服を着た青年は、一誠を見てそう言った。

「(此奴……部長が言っていた『悪魔祓い(エクソシスト)か!?)」

一誠は、思い出したかの様に青年の正体に気付いた。

「お前、『悪魔祓い(エクソシスト)か!」

一誠は、青年にそう叫んだ。

「正解です。俺つちの名前は、フリード・セルゼンでございます。」

一誠に自分の名前を名乗るフリード。

「この人を殺したのは、お前か？」

「Yes! Yes! 俺たちが殺しちやいました〜〜コイツ悪魔を呼び出す常習犯だしいー殺すしかないっしょ！」

「(コイツ・・・ヤバすぎる!)」

一誠は、フリードの台詞に悪寒を感じ取り一歩下がった。

「つという事で・・・悪魔くんをこのカツコイイ光の剣と銃で、君をKO☆RO☆SI☆TE! 君の人生をジ・エンドにしちやいまくす!!?」

そう言つて、一誠に襲い掛かるフリード。

「うおっ! あつぶん「ハイ☆バキーン!」ぐあつ!」

一誠は光の剣の攻撃を躲すが、銃による追撃を受けてしまう。

「があああああつ!」

「エクソシスト特性祓魔弾、お味はいかががつかあ?」

「クツソオ、このヤロオ!」

ー【Boost】ー

一誠は神器を発動させる。

「ウツヒヨウ! まさに悪魔。その方が雰囲気が出ますなあ〜・・・でも」

「ウオオオオツッ!」

「あらよつと。」

フリードは、一誠のパンチを躲して背中を光の剣で斬りつける。

ズシャッ!

「ぐああああっ!」

「はあ．．．見掛け倒しさんすかあ? そう言うのが一番．．．ムカつくんすよ!」

「キヤアアアアアッ!」

フリードが光の剣を振り上げると、少女の悲鳴が聞こえた。

「おんやあ? 助手のアーシアちゃんじゃあゝゝりませんか、これはこれは可愛い悲鳴をありがとうございます。」

「ふ、フリード神父．．．その人は．．．」

「ヒトオ? 違う違う、こいつはクソ悪魔くんだよ」

「イツセーさんが．．．悪魔．．．?」

フリードの言葉に目を見開いて、一誠を見てそう呟くアーシア。

「何々、君たち知り合い? アハハ! 悪魔と人間は相容れません! 特に教会関係者と悪魔は天敵さ! それに俺っち達は神に見放された異端の集まりですぜ? 墮天使様からのご加護がないと生きていけないですぜ。」

そう言つて、銃口を一誠に向ける。

「……なあにしてんのアーシアちゃん？」

アーシアが一誠を庇う様に出た。

「フリード神父お願いです！ イッセーさんを許して下さい！ 見逃して下さい!!？」

「はあああ!!? 何言つてるんだクソアマ！ 悪魔は、俺っち達の天敵！ 敵なの！ ぶつ殺さないといけない悪なの!!？」

「それでも！ イッセーさんは違います！ イッセーさんは決して悪い悪魔ではありません！ イッセーさんは私を助けて下さいました。悪魔の方にもきつと良い人はいます！」

「居ねエよ！ クソ悪魔は所詮クソ悪魔何だよ！ ぶつ殺さないといけないクソ悪魔で、クズ種族何だよ!!? だから、そこを退けよアーシアちゃん……現実見せて差し上げますんで！」

「やめて下さい！ フリード神父！」

「あーっ！ うるせえうるせえ!!」

「キャッ！」

フリードはイライラして、アーシアを突き飛ばす。

「アーシア！」

「そのクソ悪魔をぶつ殺したらテメエも再教育してやるから覚悟しとけ！」

そうやって、再び銃口を一誠に向けた。

「イツセーさん!」

「ッ!」

「フラツシユタイミング!マジック、『サジツタフレイム』を使用!!?」

すると、一誠を守る様に無数の炎の矢がフリードが目掛けて飛んで来た。

「ウォツ!?!危なツ!あつ!服が燃えてるうゝゝゝ!!」

フリードは、無数の炎の矢を避け始めるが数本服に当たって燃える。

「今のは……」

「大丈夫か?イツセー……」

一誠の肩に手を置いて、安否を確認するダンの姿が其処にあった。

「ダン!?!」

「ダンさん!?!」

一誠とアーシアは、ダンの姿を見て驚いていた。

「……アーシア!?!」

ダンもアーシアが居た事に目を見開いて驚いていた。

「どうして、アーシアが……ッ!」

アーシアが何で此処にいるか考えていると、男の人の死体がある事に気付くダン。

「クソくそおい、お前！よくも俺っちの自慢の服を焦がしてくれましたね！」
「……おい。」

フリードの文句を全く聞かず、低い声でフリードに話しかけるダン。

「ん？何々、どうしたのくそ。」

「……この人を殺したのは、お前か？」

顔を前髪で隠れて表情が見えない状態のダンは、フリードに問う。

「ん？ああくそくそそうそう！その人間を殺したのは俺っちで、間違いないツスよ！」

「……そうか」

「いやくそ中々良い悲鳴で、もう快☆感！最高でなnへドゴオオオン!!」……へ？」

フリードが調子に乗って話し始めた瞬間、フリードの横を何かが通り過ぎると壁が破壊されていていた。そして、フリードは何が起こったのか理解出来ず啞然する。

「……黙れ……もう、喋るな……。」

其処には、ジーク・アポロの鎧を纏っているダンの姿があった。それも、静かな殺気を出しながら……。

「だ、ダン……？」

「だ、ダンさん……？」

一誠とアーシアは、ダンの様子が違う事に驚いていた。

「(な、何だ……この心臓を締め付けるほどの殺気は!?)」

フリードはダンの殺気を受けて冷や汗をかく。

【戻って来い……ケルベロード】

「グルルルルツ!」

其処には、鎧兜で武装した四つん這いのブレイヴ……『牙皇ケルベロード』が破壊された壁の方から出て来た。

「うえ!?!何なのあれ!?!」

フリードは、ケルベロードの姿を見た瞬間、物凄く驚いたのだった。

【牙皇ケルベロード、ブレイヴだ!】

ダンがそう叫ぶと、ケルベロードは走り出す。すると、翼が出現してケルベロードは身体を丸めさせて本体は消えてその翼はダンが纏っている鎧、ジーク・アポロの背中の翼が消えたと同時に合体する。すると、両肩にアーマーが追加された。そして、胸に武装されているバトルフォームのプレートが青色へと変わる。

「うえ!?!合体しちやった!?!」

フリードは、ダンが先程の獣と合体した事に驚いていた。

【いくぞ……ブレイヴアタック!】

ダンがそう叫ぶと翼から無数の羽が、フリードに向かって襲い掛かった。

「うぎやあああつ!?」

「ドドドドドドドドド!!!ドゴオオオン!!!」

「ゴフツ!」

フリードは、避ける事が出来ず無数の羽が当たってそのまま爆発に巻き込まれたのだった。その爆風で、フリードは壁へ吹き飛ばされぶち当たる。

「うぎぎぎぎぎぎぎぎガクッ」

フリードは少し動いた後、気絶した。

【安心しろ………命まで取る気はない、加減はした。】

そう言って、一誠とアシアの方へと歩いて行った。

—————

くお知らせく

どうも皆さん…作者のブレイヴです。今日皆様にお知らせしなければならぬ事が二つあります…。まず、一つは、この馬神弾のクロスオーバー小説のハイスクールD×Dを停止する事です。理由は、放置していた事とストーリーが滅茶苦茶になってしまいましたので…停止をします。

ただ…もう一つのお知らせが、バトスピのアニメにダンさんが帰ってくるという事で

：新しくダンさんとハイスクールD×Dの小説を書かせていただきます!! 投稿は、何時になるか分かりませんが暖かく見守って下さいよろしく願います!

話の方は、出来るだけ完成させて投稿させますので許して下さい!!

???：あらあら：投稿を放置した理由を言わないんですか?

：………ひいひいっ!!?

ル
???：ふふふ♪向こうで私とO☆HA☆NA☆SHIしましょうか♪(ズルズルズルズ

あつ、ま、待って下さい!?あつ、アアアアアアアツ!!!

???：自業自得です…。(もぐもぐ)

???：あはは：仕方ないのかな? (苦笑)

???：相変わらず???先輩怖ええ：

???：あう：???さん大丈夫でしょうか?

???：帰って来たら治してあげなさい???

???：はい!

???：………そろそろ自己紹介するか?

???：そうね：それじゃあ：私からするわ。読者の皆さん? 先程は、お見苦しいところ

をお見せしてしまい申し訳ございません…此処にいる代表として謝罪させてもらうわね? それじゃあ♪気を取り直して…御機嫌よう♪私は、この名前は、リアス・グレモリーよ? ハイスクールD×Dのメインヒロインでオカルト研究部の部長をしているわ!

??? : ふふふ…皆様御機嫌よう…私は、姫島朱乃と言いますわ♪オカルト研究部の副部長でリアスのクイーンですわ♪

??? : あれ!? 朱乃先輩!! どうして此処に!?

朱乃 : 作者さんが寝てしまったので此処に来たのですわ??? 君♪

??? : そ、そっすか… (冷や汗)

リアス : 朱乃? やり過ぎは、駄目よ?

朱乃 : ふふふ♪大丈夫ですわ♪加減は、しましたもの… (黒い笑み)

リアス : そ、そうね… (冷や汗)

??? : 次は僕ですね? 僕は、木場佑斗って言います。二年で、オカルト研究部に所属しています。そして、リアス部長のナイトです。

??? : んじゃあ次は、俺だな! 俺は、ハイスクールD×Dの主人公で二年の兵藤一誠だ! 皆からイツセーと呼ばれているぜ! それから、リアス部長の最強のポーンで、ハーレム王になる男だ! よろしくな!

??? : あう…えつと…アーシア・アルジエントと言います／／! 皆さんよろしくお願

いしましゅっ／＼／！

イツセー：やっぱ可愛いなアーシアは！

木場：そうだね。

朱乃：あらあらうふふ

リアス：可愛いわよアーシア？

アーシア：あう／＼／＼（顔を真っ赤にして）

???：……次は、私ですね？皆さん……どうもです……一年の塔城小猫です……よろしくお願

いします……。

???：他にないのか？

小猫：後……貴方のメインヒロインです……／＼／

???：っ／＼／！

イツセー：なんだ!?あの甘い空間は!!?

???：……つ、次は！俺だな!?ふう……改めて久しぶりだな？コラボの主人公の馬神弾だ……

今回の件……本当にすまない……でも、新しく書く方には、楽しみに待っていてくれると助

かる……また読者の皆さんと会うのを楽しみに待っています……それでは、またいつか……作

品で……

イツセー：……って、何勝手に終わらせようとしているんだ!?

ダン：いや…もう、話す事無いから…

イツセー：……それもそうだな？

リアス：それじゃあ、終わりましたようか？

全員：はい！

ダン：それじゃあ…楽しみにしてくれよな？ 決めろ！ ブレイヴアタック！！